

# 第3回 「むのたけじ反戦塾」 手元資料



- 日時 2023年7月6日（木） 13時30分～16時50分
- 会場 文京区民センター3C会議室（30人室）

## 【プログラム】

13:00 開場 13:30 開会

### プログラム（案）

- ① 13:30～15:00  
自己紹介（私の考え）+むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』第2章「農耕の中からもなによえ戦争が」前半から（P.56～79）
- ② 15:10～15:40 フリートーク  
（8月26日予定の「拡大むのたけじ反戦塾」  
企画・計画・立案検討会）
- ③ 15:45～16:30 参考映像『100年インタビュー  
ジャーナリストむのたけじ』NHKB S前半45分

\*参加希望者は下記までご連絡を！

参加費：1000円 学生・若者：500円

## 【この手元資料の内容】

- 資料① 第3回 むのたけじ反戦塾のプログラム
- 資料② ウクライナ戦争をめぐる私の思い  
武野大策
- 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾  
（2023年3月12日）の参加者発言記録
- 資料④ 岩波新書の編集を通して、  
むのたけじさんのこと 坂巻克己さん
- 資料⑤ 揺るぎなき民意が戦争を止め平和をつくり出す  
石井碩行さん（「比企丘陵から」）
- 資料⑥ 朝日新聞社「Journalism」の記事から
- 資料⑦ 100年インタビュー番組紹介 ほか
- 資料⑧ 「希望は絶望のど真ん中に」  
第2章 農耕の中からもなによえ戦争が（前）

## むのたけじ反戦塾

問合せ先：090-4599-5314  
〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201  
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

## 資料① 第3回 むのたけじ反戦塾のプログラム

### 第3回 むのたけじ反戦塾

日時：2023年7月6日（木）13:30～16:30

会場：文京区民センター3C会議室（30名）  
（地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分）

#### プログラム（予定）：

- ① 自己紹介+『希望は絶望のど真ん中に』  
「第二章：農耕の中から何ゆえ戦争が」（前半）  
を手がかりに（90分：13：30～15：00）
  - ・自己紹介を兼ねて「今思っていること」を出し合い話し合います。
  - ・話し合いのきっかけ作りに『希望は絶望のど真ん中に』（岩波新書）の第二章を読んできてもらって「なるほどと納得したところ」「知らなかったなあと思ったところ」あるいは「これは、今の問題にも当てはまる」と思ったところを出し合うところから始めます。
  - ・『希望は絶望のど真ん中に』「第二章」（前半）部分は、この「手元資料」後半にコピーを転載していますので、裏表紙からウラ開きで読んで下さい。
  - ・加えて、①最近「反戦」について読んだ本、番組、聞いた情報を持ち合う  
②「今、緊要に何とかしなければと思っていること」は何か？など、普段考えていることを出し合っていきたいと思えます。
- ② 8月「拡大『むのたけじ反戦塾』講演会」企画のための意見の出し合い・練り合い  
（30分：15：10～15：40）
  - ・「むのたけじ反戦塾」事務担当は、むのたけじさんが亡くなって7年目にあたる8月26日（日）、第4回『むのたけじ反戦塾』を拡大して講演会のようなものを計画しています。
  - ・その企画とプログラムの検討等の準備をこれまで「反戦塾」に参加したみなさんと進めたいと思えます。どうぞよろしくおねがいします。
- ③ 参考上映『100年インタビュー  
ジャーナリストむのたけじ』（前半）  
NHK-BS（45分：15：45～16：30）
  - ・90分と長い番組なので、前後編に分けて鑑賞します。
  - ・第5回は10月頃を予定

※参加希望者をご連絡をお願いします。  
問合せ先：090-4599-5314 武野  
E-Mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

## 資料② ウクライナ戦争をめぐる私の思い

### 武野大策

むのたけじを紹介する時、必ず「戦時中の報道責任を感じて」という言葉がつく。それでは、今の報道は責任を感じなくて済むようなことをしているか、考えてみたい。むのたけじによれば戦時中の報道が曲げられたのは今の言葉で言う「忖度」、すなわち自己規制からと言う。しかし、一般的には報道がねじ曲げられたのは治安維持法などに紐付けされた数々の報道規制からのように思われている。それでは、現代日本には治安維持法がない。ウクライナ戦争は、岸田総理は前のめりの態度が見えるが、多くの国民から見れば、地味的にも遠いことなので利害関係は比較的薄い。そう考えたら、ウクライナ戦争は自由な報道ができるはずだし、客観的な報道がなされてよいはず。しかし、現実を見ると必ずしも、私はそうではないように見える。戦時報道で問題とされた代表的な問題はふたつです。まず、「戦意高揚」です。ウクライナが西側からのお援助の武器を使って反転攻勢に出る話をとりわけ強く報道したりしている。これは第二次世界大戦中に日本国民にしていたのと同じではないかと。もちろん、日本の報道が直接ウクライナ国民に伝わるはずがない。

しかし、報道に携わるものは、どうやって戦争を終わらせ、話し合いで解決するような視点を持って、報道に携わるべきだと私は思う。それは決して偏った報道ではない。日本で、そうした報道をしても関係ないと言うかもしれないが、私は戦争をやめさせる国際世論を形成するのに役立つと思うからです。

もう一つは、被害の程度をできるだけ小さく見せるようにしていることです。私は現地を見ているわけではないので言いにくいですが、最近の死者数がとても少ないように思っています。例えば、ドニプロ川のカホウカ・ダムが破壊され、一面水浸しになっているのに、死者数は、これから増えるかもしれないと言う言葉がついているが、14人と少ない。日本の戦争で被害が少なく見せるのは、戦争を継続したいときでしたが、ウクライナでもそうした思惑があるように見えて仕方がない。こうした状況から、日本の報道では、現在の状況はウクライナが西側諸国から支援された武器を使って、ロシアが侵略で奪った土地を全て取り戻すようなことを言っています。確かに、ウクライナ国内には戦争を継続したい勢力が一定数いると思いますが、支援する側から考えると戦争を継続するのはもう限界だと私は思います。だから、6月21日から2日間イギリスでウクライナの復興会議が開かれたのだと推測する。復興に向けた取り組みは最低限休戦がなされなければ始まらないことです。そう考えると、ロシアの侵略により取られたところを本当に秋くらいまでの近い将来に取り戻せるかという話になります。私の見るところでは、それは無理で今の両軍が対峙しているところで折り合わざるを得ないのではと想像するのです。いずれにしろ、西側もこれ以上ウクライナに支援することは難しく、停戦に向けた動きを加速させていると見ました。

そう考えた時に、プリンケン米國務長官がウクライナ復興会議に参加する途中で、中国に立ち寄った。日本の新聞では台湾有事のことばかり話題になったように言っているが、私は「台湾有事」はもはや言葉のあやだけだと思いました。停戦に向けた活動をしてくれという願いをしていると見るべきです。だから、18日には秦剛（チンカン）國務委員兼外相と5時間以上会談し、翌日には共産党外交部門トップの王毅（ワンイー）政治局員らとの話し合い、最終的には習近平国家主席まで会談している。

そうしたことから、私は休戦に向かうだろうという予測を書こうとペンを進めていたのですが、24日になって、民間軍事会社「ワグネル」の創始者プリゴジン氏の反乱が伝えられた。

これで私は情勢が読めなくなった。ここで一つだけ言えることは、戦端を一度開くと、予想外の展開が起きるものです。そのためにも、戦争は起こしてはならないと私は強く思いました。それにつけても、報道機関が正確な情報と、今後の予測を書いてくれるとよいが、現状では今言ったようにそれは叶わない。だから、私たちは常に世の中の動きを議論することが大切なように思います。その点でも、この「むのたけじ反戦塾」の存在意義があるように思います。

こうした報道しかしていないから、ウクライナ戦争が多くのウクライナの人々を苦しめているのは確かだと思うのに、ベトナム戦争の時のような反戦運動が起きないのではないかと。ベトナム戦争の時、私は15歳くらいですが、反戦運動で世界中が盛り上がったものです。なぜ、同じようなことが起きないのか不思議でなりません。

さらに今の状況からいえば、反戦運動だけでなく、むのたけじが「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ」という、戦争そのものを無くす運動に発展させることも大切だと強く思うのです。「希望は絶望のど真ん中に」第二章では、戦争が始まったのは農耕創始からで、それ以前はなかったから、戦争はなくせるということ論じています。



## 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（1）



※この「第2回むのたけじ反戦塾記録」は、録音したものの書き起こしでしたが、どうも編集者の知識と教養の無さから、聞き取れなかったり、よくわからなかったりしたところがありました。話者のイニシャルから、ご自分の発言と思われるところで、間違いがありましたらお知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。

### 【参加者・自己紹介+私が今、考えていること】

●（司会）きょうは、お集まりいただきありがとうございます。1回目の反戦塾は、昨年12月18日に初めて行い、27の方がいらっやあって、熱のこもったお話になり、私たちがやるうとしていた会ができたと思ってとても感動しました。今日は少人数で一人一人が十分にお話ができるような会にすることで考えております。

最初にお詫びから始めさせていただきます。お手元の資料、前回来ていただいた方にお送りしなきゃいけないと思って、1週間前になってはじめて送れたんですけれどもすごくミスが多くてですね、恥ずかしいものを出してしまって申し訳ありませんでした。前回参加いただいた方の自己紹介をさせていただいた部分を書き起こしたんですけど、「自分はこんなこと言っていない」とか思われる方がいらっやしたら、教えて下さい。

書き起こしをしていると、あらためて皆さんの発言が、今の（社会）状況をどう考えられているかということがよく感じられて、これはちゃんと書き残して、当日いらっやらなかつた人にも読んでいただくなり、あるいは話してわかったことを伝えていきたいと思い、今後もその形を続けていきたいと思えます。

今回の話の前に、前回の反戦塾のまとめと言いますか、そこで得たものからお話していきたいと思えます。1回目に参加された方には、重なる部分があると思うんですけど、討議をする前に自己紹介はしていただきます。その中で前回の感想でも結構ですし、また今の情勢って言いますか、とくに大軍拡だとか、岸田政権のいくつものアメリカと一緒に戦争をするような国にしていくっていうことに対して、危機感って言いますか、とくにそれがほとんど知らされていないっていうことに、何とかしなきゃいけないと思っているんだけどどうして行ったらいいかっていうのがなかなかつかめないとかそういうご意見が多かったように思えます。自己紹介をされてる中で、今それぞれ考えられていることについてお話させていただくということで結構ですけども、そういった今の状況の中で例えば「こんな話を聞いた」とか、「こんなところの集会に行ったらこんな話があったのかなかなか良かった」とか、あるいは「こういう映像は結構みんなで見ても使えるんじゃないか」とかそういうことなど得たものも共有し、一緒に考えていきたいなと思えます。

前回の話の中でも例えば「平和の提言」ですか、「平和構想会議ってのがあるから、この内容をちょっと勉強会であったからその中でやったらいいんじゃないか」と言うお話がありました。そうした「九条についての憲法についてのこういう本があって、こういったことが書かれているとか、いくつかありますのでそういったものをまた紹介しながらやっていきたいと思えます。

私が、こういった会をやりたいなと思ったのは、先ほどお話ししたように「何とかしなきゃいけない」って思った時に、「やっぱり無理だって」考えてしまうのではなく、何とか具体的に、「こういった話を聞いた」とか、「ああいった話をもっと伝えていきたい」というように具体的にしていって、そのあたりも、この後の討論でもご紹介いただければと思っております。

●M.N.（男性） 岩手県は雫石に生まれて、何から話せばいいか、こう言う会はじめてで、たまたま東京新聞を読んでまして、この会があるということを知りまして、どういふ会か全く分からずに来ました。私がずっと思っていたのは、昔、まだ元気ですが本多勝一さんが大好きで、むのさんと何かのやりとりをして何かあったっていうのが記憶がありまして、それがよみがえって今日参加したところです。いろいろきょう、ここで学んで、勉強してきました。大学は桂太郎が作った拓殖大学。桂太郎があ頃は馬に乗ってました。今は、こんな本を出しました。マラソンばかりしてて、一応そういう歴史を全く学んでなかったんですが、なぜか朝日ジャーナルだけは読むよりも、見てまし、その中で本多勝一さんにさんにぶつかりまして、いろいろとこういうことを勉強しながらやっています。40まではそういう歴史を学ばなくて、たまたまマラソン仲間で韓国生まれのミス・ソウルだったっていう人が日本人と結婚して、それですは朝鮮・韓国問題から入りました。今日来た一つの目的は、むのさんと本多勝一さん、何のやり取りがあったのか、もしご存知の方がいましたらお聞きしたいということです。

●K.Y.（女性）千葉の流山から来ました。本月15日に幕張メッセで武器の見本市をやるその反対集会があります興味がありましたらそちらのほうにもいらっやしてください。

●R.S.（女性）5ページのRSの下に線が引いてあるところを言います。『夫のボケは神さまからの贈り物』っていう本を書きました。昨日まで江古田の映画祭がありまして、大変盛況でした。その時、まだこの先使えそうなチラシを少しもらって来ましたので、お使いください。ともかく私はやっぱり今日はそうでもないですけども、江古田も女性がすごい力を付けてますね。映画監督の中にも女性がたくさんいらっやるので、私は女性の出番を期待しています。

●T.I.（男性）資料の3ページのT.I.（男性）というのが私です。私、ここに書いてありますように、むのさんが言われているいま最大の課題は、戦争を無くすことだと、で、そのためにも、たまたま私は父が職業軍人だったものから、その子供としての責任ということも含めてですね、正しいとかちゃんとしたその問題意識を持つためにも日本のですね、近現代史を学び直すということがですね、自分にとっては最大の課題だと、いうことで、たまたま東京に住んでるということもあってですね、ここ3~4ヶ月の間に神保町とか、早稲田通りとか、ブックオフとかですね、とにかくもう足で探し回って参考になるんですね、この問題について考える材料になりそうな本をですね、40冊ぐらい手に入れました。社会とか歴史が好きだったのでですけども残念ながらですね、歴史は単なる暗記物という認識しかなくてですね、しかも習ったのは近世というかな維新までで、近代習うにしてもですね、駆け足ということでこれまで過ごしてきたもんですから、いや本当に学ぶことが多いんだということですね、これから楽しみですね、ひとつひとつ読みながらですね、私としての問題意識を作っていきたいと思えます。

## 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（2）

●S.M.（男性）北海道から来ました。私の本職は治療する仕事です。今、コロナの接種した人とか、後遺症など医療の中での産業革命のような事態に陥っております。しかしただ一つは趣味がありまして映画を見ることなんです。たった1つなんですけど、けどこの中で4、5年前に見たに見たむのさんの映画の中で大変感動しました。ただ自分の職業、仕事だけをやっているのではなくて、何が出来るんだろうと、常々考えております。

私は今84歳で、85歳に向かってます。ほかの方々がたいいできなかつたことは、終戦当時に私は小学校1年、国民小学校、国民小学校に行っていたんですが、我々子どもが大人になった時に天皇陛下を守るという、そういう教育をされました。体育の時間はほとんど防空演習でほふく運動とかあるいは敵からどうやって逃げるか、立って逃げてはダメなんですね、そんな経験が残ってまして、これはやっぱり次世代につないでいくことかな、そう思いながら、これからの自分の課題を見つけて、模索をしていることです。コロナの問題と、自分自身のこれからやっていくこと、むのさんの話では、今、気がついた時が発時点だ、と言うことを話してました。これから第3次世界対戦に向かうような状況下にありますが、何が出来るんだろう、どうすればいいんだろうと言うことがこれからの私の学習です。

17:32

●K.S.（男性）目黒から来ました。私の趣味は、海外旅行で、「何でも見てやろう」ということで、今年も1月にイスラエル、パレスチナに行ってきました。帰ってきたら、あの平和だったエルサレムで銃撃でユダヤ人とパレスチナ人が何人か死んだ、と言うことで、行って見て、パレスチナに行っても、結局はイスラエルに支配されているようなもんですごく平和な感じしたんですけど。ガザ地区は立ち入り禁止でいけなかったんですけど。いま、ロシアのウクライナ侵略のことであれこれ言われてますが、3年ほど前はこのコロナの前の時に、私はクラブツーリズムのツアーで行ったんですけど、モルドバ、ウクライナ、ベラルーシを回るツアーです。モルドバからウクライナのオデッサに出る時、バスで行ったんですけど、その時に沿ドニエストル共和国というロシアしか認めていないのがモルドバの中であるんですね。やっぱりゼレンスキーは東側を沿ドニエストル共和国で、独立されているような感じだし、南はウクライナのクリミア半島やられて、東側、南側ベラルーシで、全部囲まれたようなんでね、ゼレンスキーは反対して立ち上がったんだと思うんですけど、それで去年3月9日に港区の異業種交流会というところに、私参加したんですけど、ロシア系ウクライナ系ロシア人が来ててですねプーチン言うことをゼレンスキーが聞かなかつたからあんなんであって、彼女言うには、私はモスクワの大学に留学してる時にちょうどソ連邦が崩壊して、ウクライナが独立したんですけど、その時にウクライナにですねロシアの選択とウクライナの選択があって彼女は私はロシアを選択しましたということでロシアのパスポートでも日本へ来て30年ほどなるんですけどウクライナにもロシアの方になってもいい言う人がいるということですね、そのことを武力で解決するか、話し合いで解決するかとというたら武力になる言うことになるんですけど、ソウルによく行くのは国内旅行が出来るから言うことで、雪祭りを見るためにソウル発にしたら、札幌までただで行けるんですね。雪祭り見て、その後、辺野古の座り込みにも沖縄に飛んで参加しました。そしたらあの辺野古、ゴボウ抜きにされるまで、あのランプから入るまで待つかなっていったら、自主的に立ち退きます、というのは座り込みしているのは定年退職した先生方が多いんで、沖縄県警に教え子がいてですね、教え子は先生をするのも、両方とも嫌だと言うので、あのギリギリまであのダンプが50代ほど入るのを阻止して自主的に退去しますが、台湾にも2月28日の228っていつてですね1947年、日本が撤退してから1年半後に台湾人が蜂起して中国人と戦って結局2万人ほど殺されたんですけどそのまま追悼集会にも参加したんですけど台湾有事があるのに、まあ台湾の空港もそんなに厳しい状態じゃなかったんですけど普通の台湾人が普通の生活してて結局現状維持言うことで、アメリカが言う全て現状維持だったら平和じゃないかなという感じがしました。

●K.S.（男性）資料の3ページの右側のK.S.と書いてあるのが私の自己紹介です。12年前に岩波書店を定年退職したんですけど、それまでに雑誌や書籍でむのさんに、まさにいろいろお世話になったという関わりがあって今日この後その話をするようにということで、やらせていただきます。

●F.O.（女性）勉強したくて、初めてですけど参加させていただきます。よろしくお祈りします。

●M.（男性）月刊「望星」望む星と書いて東海大学系の小さな月刊誌で、一昨年から「昭和20年代を歩く」という連載を書いているフリーの記者です。それできょうは、むのさんのことを書いた昭和20年代のことを今取材してまして、先週から今週かけて横手も数日間行ってきました。それで大策さんにお話を聞かせて欲しいということで、じゃあ今日こういうのがあるから来たらどうかということでお邪魔してます。ということ。4月か5月ぐらいから上中下で、記事になると思います。よろしくお祈りします。

●S.（男性）渋谷区から来ました。私も東京新聞見てきたんですが、来てみたらちょっと場違いだったかなと思ってます。私もなるべく発言はしないようにしますが、いろいろこういった集まりとかにはよく顔出すんですけども、政治的なこととか沖縄の問題とか最近話題になってる\*\*パス、あれも免許証もらってもっているんですけど、ただ残念なことに、あの記憶力があまり良くないんでどっか行ってきて中身はほとんど覚えてないって現状です。適当なところを見計らって退散しようかなと思っています。

●T.O.（男性）54歳で単身赴任で東京にいるんで普通のサラリーマンなんですけど90年代頃からずっと社会運動みたいなことに関わって今日こういう集まりがあるっていうのは電話して参加させていただきました。自分の話じゃなくてこれ資料がテーブルから起こしたっていう風にして書いてあってテーブル起こして膨大な作業なんですよ。それぐらいこうあの情熱的に熱意を持ってなんか話をする会に来たっていうことをちょっと楽しみにして今日の議論に参加したいというふうに思います。

●H.I.（男性）東松山から来ました。4ページのH.I.っていう前回の発言の記事が4ページ左側のところに載ってます。今日司会の方から「何か情報があったら紹介しあいましょう」ということがありましたので、前回とも関係あるんですがちょっと前回も話題に入れたんですが、コスタリカの非軍事化の問題、これについて非常に良い本があるんですね。Judith Eve Liptonと言う人とDavid P.Barash っていう人が「平和を通じて培われた力」というオックスフォード大学から出てる本がありまして、とくに第3章にコスタリカの非軍事化ということに集中した章があります。私、訳してもらったコピーを今日持ってきてますので、もし希望があったら見る事ができると思います。そのこと、非常に綿密にたくさん書いてあるので、だいたいどういうこと言ってるのかなということとその要点をまとめた文章を私が「比企丘陵から」というミニコミ誌に書きましたので、これはもし希望のある方ありましたらお伝えすることができるかと思えます。（\*この「手元資料の15ページに転載させていただきました」）なぜ、こんなことに触れたかと言いますとね、日本が九条という憲法の宝を持っていくにもかかわらずですね、岸田政権は大転換をして戦争ができるって言うよりも戦争をやろうとしてるそういう臨戦態勢に入っていくようなそういう大転換期に今入っているわけです。（次ページへ）



## 資料⑥ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（3）

むのさんの言葉から言うとですね、「地球が世界大戦によって滅びてもおかしくないような崖っぷちに立たされているのに、それに気づかない鈍感な人間達が安穩と過ごしている」という指摘があります。そういう中で、コスタリカって言う国は、まわりは中南米ですから、アメリカのCIAもありますし、まわりの中南米の国は独裁、クーデター連続でありまして、そういう状況の中でクーデターとかテロとかそういうものが彷彿としている、そういう状況の中で、いかようにしてですね、コスタリカは非軍事化をやっている国だってことをここに集まっている方はご存じの方だと思いますけども、僕もそう思ったんですけども、それじゃそのような状況の中で、どのようにして非軍事化の社会を創り出したのか、また非軍事化のそういう社会をどのようにして維持してきたのかと、言うことを、この戦争の時代の真っ只中において、この本はコスタリカの非軍事化が、どのようにして形成され、維持されているってことを具体的に歴史的事実を追いながらトレースしながら私たちに解き明かしてくれてるです。ですから司会の方から、何か新しい耳寄りな情報があったら発言しなさいということですので皆さんに提供しておきたいと思っております。これを読むのに時間がかかります。非常に綿密に書いてありますから。だいたいどういうことなのかと言うことをまとめたものがこの「比企丘陵から」と言うミニコミ誌にまとめたものがあります。これを読めば、粗雑な文章ですけど、大雑把には分かっていたかと思っているところでもあります。

それであの、むのさんのきょうの送ってもらった資料のところはこれから皆さんと一緒に勉強するわけですが、僕はやっぱり圧倒されたんですね。すごい大きなスパイラルの中ですね、彼が人間という生き物が本質的にどういうことなのかと、どういうことを目指して生きていけばいいのかっていうことですね。699万のえいり(?)の中からですね、それを探り当ててそしてそれを指摘してるということです。後から皆さんの発言に学びながらですね、どういふ風に皆さんが発言するのか楽しみに胸をわくわくしながら待ってるところでございます。その中で1万年前から農耕を開始し、そして社会は進歩した。昔は野蛮だっていうようなことを言ってる学者もいますけど、いったいほんまなのかと、いったい人間っていつ頃から戦争するようになったのか、どういふことが戦争を行うことにつながるのか、本来人間はどういふことを考えていかなければならないのか、そういうことを本当に声を大にしてこの資料の中で訴えてるところありますので具体的には皆さんの鋭い発言をお聞きしながら勉強したいと思って今日参った次第です。よろしくお願ひいたします。

●D.M. (男性) 4ページの右側のD.M.って書いています。息子です。むのたけじの次男をやってます。それでですね、先ほどあのまあ皆さんの言葉が、「今に第3次世界大戦が起きるんじゃないか」ってそういうような危機感、戦争に日本が突入するんじゃないかっていう危機感ということで話をして、「何をしたらいいか」っていうことを話してられましたけれども、これに対してはうちの父は明確に一言を言っていました。何かって言うのと「声を出しなさい」って。とにかく声を出しなさいって。そう言うような声を出す場としてですね、こう言う勉強会をしたいって言う時にですね、この会を作ったわけで、そのために誰か講師を呼んでこの人の話を聞くってパターンじゃなくて皆さんが一人一人が全部発言できるような、そういう会を作りたいということでこの会が成り立ってるって言う、そういうようななんです。とにかくやっぱり今は皆さんが自分の考えをもうどんどん出していくって言うようなことでやっていくとはとても大事なことだと思います。それであのちょっとだけ部数が少ないものなんですけれども、まあ朝日新聞の「ジャーナリズム」(\*この手元資料16ページに一部紹介)という雑誌が今回休刊になりましたんでそれでなぜか私のところに原稿依頼が、ジャーナリストでもない私のところに原稿依頼がありまして、何を書けばいいかってにわからなくて適当に適当にあの書いたらですね、まあそれで結局この会のことを中心まあ最終的に書いたらみんな読んで回し読みして「戦争の砦」っていう「ジャーナリズムは戦争を止められるんだ」って言うそういうようなスタイルで朝日新聞ですね、最近評判の悪い朝日新聞がですね、どう言うような雑誌、非常に見ると部数が少ないみたいなんです。

しかも一番私が興味深いのは、戦後のあの反省の時に社説でこういう「朝日新聞はこういうような新聞を作ります」っていうそういうような社説を作って出したんです。そのことをバンと載せて、この本は一般向けのよりも、朝日新聞内部で相当ショックを受けたんじゃないかなというので、最初のところで、日本国憲法が最初にきてるっていう、そう言うようなことを、朝日新聞も一応やっているって言うことをやっていると言うことを紹介しておきたいと思ひます。

●M.K. (女性) テレビの録画を録ろうとしていたら、前に録っていたもので、ETV特集で、「むのたけじ100歳の不屈」というのがあって、「伝説のジャーナリスト、次世代への遺言」と言うのがたまたま録画に入っていたのを、昨日しっかり見てきたんですけども、やっぱり若い人たちに、やっぱり私たち高齢者が若い人たちに伝えていきたいなっていうふうに思ひます。

●T. (男性) 埼玉県上尾市から来ました。前回は参加して二回目です。学習会とかよく参加するんですが、先生の話を1時間か、2時間聞いて質疑応答に30分で終わりと、言うことなんですけど、この会はみなさんと意見交換できるのが面白くて、参加しました。よろしくお願ひします。

●M.C. (男性) 中野区から来ました。きっかけちょっと覚えてないんですけど、花崎さんからメールをいただくようになって、これまでも何回かの映画会とか来たんですけどもこう言う会だっただけでなくて申し込んだんですけど、今日は皆さんのお話を聞きたいと思ってお願ひします。(39:17)

●H.N. (男性) 調布市から参りました。前回は来まして、5ページの左側に書いてあるH.N.です。前回はいつか言ったんですけど、憲法を考える映画の会とかでね、日本人の加害の歴史っていうのを見る場面があってですね、それが結構ショックだったんでそこからあちこち勉強会とか行くようになって、先程もありましたように、近現代史の勉強をしたいといま、たまたまNHKのドキュメントを見ますと戦後の米国の公開文書で、分かった事実がある、2000何年か分かった事実がありますよね。そういうドキュメントがあって、こんなこと知らなくて、公文書があるじゃないですか、それがなかなか知ってる人は知ってると思うんですが、なかなか伝わっていない。僕はそういうドキュメントから映画とか、いろんな材料を中学、高校生の歴史の勉強の、自由研究のインデックスにしたいと思ひます。今自分は70過ぎてますが、自由研究のインデックスを作りたいというのがひとつのテーマです。

ちょっと2つ紹介します。たまたま見た朝日の天声人語、2月の28日版ですけど、映画『ペーパーシティ 東京大空襲の記憶』ということで日本在住のオーストラリアの方がとらえたドキュメンタリー捉えたドキュメントなんですが大空襲自体、天声人語に載ってます。天声人語にチェコ出身の方の言葉があるんです。「権力に対する人間の闘いと、忘却に対する記憶の闘いに他ならない」忘却に対する記憶の闘いということで、僕が勉強していくことも意味があるんだと、中高生に向けてそういうインデックスを作ると言うことが意味があるんだと思ひます。

もう一個、寺島美郎さんが日曜日に東京MX TVを出しているそこで行っている提言が二つありまして、今戦後77年ですけど、「戦後100年、2045年の時に日本にまだ米軍基地あるんですか」って問題提起されています。それを受けてまだ誰も議論が始まっていないんですけど、「戦後100年、まだ米軍基地あるの?」って言うことですね。もう1個はですね、高校ですけど、「歴史総合」という授業が始まりました。教科書もあるみたいですけど、歴史総合で、日本の戦争の始まり、質問で、「何で日本は戦争を始めたのかって言うのにどう答えますかね」って言うことが問題提起されています。今もう一個勉強材料として、たまたま番組表を見たらNHK教育テレビで、高校XOと言う時間が合ったみたいで、僕のテーマはそれを見ているんなドキュメンタリーとか、映画とか、インデックス、ヒモ付けすることをやろうかなと思ひます。

## 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（4）

●S.A.（男性）前回は参加しました。前回は参加しまして、5ページの右側の2番目と言いますか、S.A.です。今、立川に陸上自衛隊のオスプレイが飛んでくるようになりまして、今までは横田基地に米軍のオスプレイがあったんですが、いよいよ市の中心地にある立川飛行場という基地にも陸上自衛隊のオスプレイが飛んでくるようになりまして、基地問題は本当に他人事ではない人ごとではない、自分の問題となってきてまして、改めて安全保障の問題も、少しずつでもまた勉強していかなくちゃいけないかなと思っています。

●M.A.（阿部・女性）こんにちは。私も立川から来ました阿部美砂と申します。さきほど武野さんがおっしゃってた、むのたけじさんが「第3次世界大戦が始まろうとする時に、『始まるんじゃないか』って思った時に、何をすればいいかっていう時には『声を出さない』って言った」と本当にそれが大事なんだなということで私も人前に出るのはすごく苦手なんですけどもあの生活者ネットワークというところから立候補して昨年は市議会議員になりました。さきも立川市、いまのオスプレイが飛来するというところでもう1回飛来したんですけども、米軍基地にすでに配備されて飛んではいたんですけど、陸上自衛隊にもすでに11機のオスプレイ、暫定配備されてるということで、やっぱり市街地の上を縦横無尽に飛ばれては困るということで、しっかり飛来の中止を求めていこうということを今言っているところです。先ほどのPFAS（有機フッ素化合物＝発がん性物質を含み、横田基地からの井戸水汚染が問題化）の話もありましたけども、PFASも本当に大変な問題で、今あの取り組んでいるところですけど自治体としてはなかなか自分たちは関与しないっていうところなんです。なので自治体自体からしっかりと考えていかなくちゃいけない問題かなと思っています。やっぱり声を上げるためにはいろんな方についての状態を知ってもらうということが大事だなと思ってるのでこういう会がどんどん広がっていくことを希望しています。

●S.N.（女性）前回の私の発言は5ページの右側の一番下、S.N.とあります。皆様いろんなことをおっしゃっていただいて、私も何を言おうかとわかんなくなっちゃったんですけども、この頃考えてることが、とにかく何も自分がよくわかってないということなんです。例えば去年、土地利用規制法ってのがあって、みんなこれ危険だ危険だって大騒ぎして、でもこれをちゃんと理解しようと思うと、これをプリントアウトしますとA4、3ページ位の法律情報なんです。それをまず自分で読んで理解しなければならぬ。それもすごい大変な作業なんです。とにかくいろんなことがよくわかってない、分かっていないけれどもものごとをよくして行くにはどうしたらいいのかって言うこと、それが自分の課題です。

●司会（男性）憲法を考える映画の会をずっとやってきて、やっぱり話し合いの時間をなるべく多くとろうとしてきたのですが、やはり人数が多くなると、なかなか、…最初の頃は20人とか、30人だったんで、一言だけでもお話を聞くことが出来たんですけど、それが出来なくなると、言うことがあって、映画って言うことだけでなく、みなさんが今考えていることをどんどん出していくことが出来ればと言うことで、この会を武野さんにもお願いしてできました。今私が一番やりたいことは何だろうか、一番伝えたい、自分が知ってそれを伝えるって言うんじゃないかと、自分も分からないから、一緒になって考えて、あれはこうじゃないか、あーじゃないかって言うのをそういうことをやっていきたいと言う、そんな中でのテーマの一番をやはり今のこの国の政治って言うのが一番あの材料が知りたいんですね。だから今日もちょっと何ったように、こう言う本が出てるとか、こういってここにこういって書いてあるとか、あるいはこういう集会有るとか、こういう人が割といいこと言ってるよとかいう話をできれば、ここで聞いてそれをまわりの人にですね、拡げていきたい、知らせていきたい、そういうことを考えて、みなさんの発言とか、みなさんの知り得た情報って言うのがですね、共有できるわけですね。そしてそれをまた拡げて行くことができる。ア

だから、これも何回も、何回も直しながら、より正しいものにして行こうと思うし、例えばこの中でこう言う言葉が出てきてその中の、コスタリカの大統領の名前どうしても聞き取れないんですね。そしたらウキペディアで探して、貼り付けていこうとか、この資料の中で話が、武野さんの前の話が参考になったんでその中に資料として前のものを入れていこうとかそういう風にどんどん膨らまして行く生きもののように自分たちの考えであるとか、情報であるとか、知識であるとか、そういったものを出し合って私も正直なところ現在の軍事問題に対してちゃんと理解できなくなっていると言うことは確かなんです。でもどういったところでそれを調べられるのかとか、そこで肝心なのは何なのかとか、そういうことを知っていくことで、人にも話をする事ができる、「あそこ行くといいと思うよ」、「この映画見たいと思う」という話をわりとやっていきたいと思えます。そのテスト、試験のようなものつくりでやっていきます。

これから本題に入らせていただきます。むのたけじさんの本の中から少しづつ、それを紐解いて、「何でむのたけじさんか」って、今の状況の中で「どうしたらいいか？」って言うことに答えが出てくる話で、一番ピンと来たのは、2016年のむのたけじさんの有明（憲法集会）での発言です。それを映画でもやって、それまでむのたけじさんって名前は知っているけど全然知らなかった、正直あまり本を読んでなかったもんですから、こういうきっかけで、むのたけじさんが晩年とくにあのいろんな形で声に出されていたんですね、反戦、「戦争を殺すのだ」「戦争のない世の中に」って言うことを。もうちょっと丁寧に紐解いていくことはできないかと読書会的なものを考えました。前回は序章の「歴史の歩みは省略を許さない」という章から入りました。

今日は第1章について皆さんが「この部分は割とちょっとピンと来たよ」とかあるいは「面白かった」とかあるいは「役に立つ」というようなことを、線でも引張ってもらったものをちょっと出し合ってそこから話をしていきたいなと思っています。

前回のことを簡単に振り返ってみたいと思います。あの詳しくはこの会にはじめて来た方もいらっしゃると思いますが、読んでもらえればどんな話があったかっていうのは分かっていただけだと思います。

前回、石井さんが発言されたこの中のフレーズと言いますか、「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることと条件で有り、資格だ」と言うことをこの序章の24ページのところで書いてあるんですけど、これについて何か今までむのたけじさんが言っていた反戦の話と憲法を捉える捉え方と全然違うんじゃないかって、どうなってんのかって言うところに話が集中したんです。これはどちらかって言うこれは憲法の9条の第2項を否定するような言い方ではないかって言うことで、むのたけじさんが言っている反戦、戦争に反対するって言うことと、結びつかない、あるいはこの中にも別に書いてあるように「日本の第9条のような憲法をこの世界で掲げている国は他にない」といっていることについて参加されたら人の中から、コスタリカをはじめ30カ国ぐらいが、軍隊を無くすって言うことを目標としているというお話がありました。そこでとくに「交戦権と軍隊、兵器の所持は国家の条件であり資格」とむのたけじさんが書かれてることに対しての話として、「これは一般論として言ってるんじゃないか」という風な一般論として言ったり、憲法を変えたがる人たちの言っていることを（代弁して）言っているんじゃないかとかそういう意見がいくつかありまして、それに対していや「一般論としてこう言われているけれども」という風なことから、言ってるんじゃないかっていう話もされました。その中でとくに坂巻さんにお話いただいた、（むのたけじさんのこの前の著作の）『戦争絶滅へ、人間復活へ』の中で憲法の持つ二重性と言いますか、それを紹介していただいて、「ああそういうことだったのか」という納得がいったと思うんですね。その回答になったところは「憲法9条とは何か、あれはいわば軍国日本に対する死刑判決です。軍備は持たせない、陸海空軍すべてダメ、交戦権も永久に放棄させる、これはあの乱暴な戦争をやった日本がもう二度と国際社会で戦争はやれなくなったということに他ならない、言い換えれば国家ではないという宣言です。交戦権を持つのが、近代国家ですから」という意味のことをさきほど「交戦権、軍隊…」のところで言っているのだと思います。（次ページへ）



## 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（5）

国として認めないことを問題にするんじゃないくて、そうしたことであの時のGHQなり、連合軍なりが出てきているもの、それに対して自分たちのやるべきことは一体何かというと、それは、正しく戦争の「総括」って言いますか、「責任」というか、「なんでこのような戦争をやったのか」と言うことに対して、人々は全くそれを自分たちで裁くことをやらないまま、憲法にこう書かれているから、もう戦争はしないんだって言うところに行ってしまったところの欺瞞性があるんじゃないか、その話の展開を、この本のこれから先の話としてやっていきたいという意味での「序章」だったんじゃないか、ということが、この話し合い話のまとめとしてあったんじゃないかなとと言う結論になりました。

●H.I（男性）今紹介を受けましたようにですね。まあ9条2項、軍隊と兵器の所持はダメ、あの戦争でやった日本、これに対して手直しを課すということで、憲法9条2項でのが突きつけられて、むのさんがそれに対して、近代国家の要件をなくしちゃった、取られちゃった。だから近代国家としてはその条件を失っちゃったんだからこれはちょっと大衝撃のことで、そのことについてはきりと意識を持たないで僕も来ちゃったんだっていうことを、むのさん自体が言っているわけですね。ところがあの、その部分だけでなくですね、きょうの（第1章と）、序章あたりのところをつなげてそのことを考えてみるとですね。むのさん自体が、なぜ、人類ってのは、国家を持って、そして軍隊を持って戦争するようになったのかってこと言っているわけですね。そこを見ていくと、むのさん自体は、やっぱり軍隊を持って、近代国家を擁して、それをやっていけば一人前の国家としての星をなすんだっていうことを言っているんじゃないくて、やっぱりコストリカもそうなんだけど、どういう風にすれば、非軍事化の本当に九条の精神が持つそういう社会を作り出せるのか、そのことを考える時に、手放して、九条を頂いたから、九条を与えられたからそれだけで平和はやっていくということではなくて、もっと人類がどうして国家を持って、そして自分と国の富をますます増やし、さらにそれを守るために戦争をやってくよになっちゃったのかっていうあたりをつなげてみるとですね、やはりただ与えられた九条っていうんじゃないくて、どのようにして本当に自分たちがどういう生活をしていけば平和社会を、戦争を起こすことのできないような国にすることはできるのか、そして、本当の意味の与えられたってところの与えられた九条ですね、軍隊で、自分の国境を守って、自分の財産を守って自分の都合が悪かったら先制攻撃をやっていくって言う、そう言うんじゃない行き方をどのようにしたら可能なのかっていうところが1945年の8.15直後にですね、本当の総括をしてないし、本当に平和国家をどういうふうにも築いていけばいいのかっていうことを、私たちは作ろうということの本気に一人一人が考えるという風にはなっていない、そういう受け身の九条を与えられたと言うことに対する平和に対する警鐘ですね、これがむのさんの発言の中に込められていたと、ここのところをやはりぼくたちははずしちゃいけない、だから字面だけ読んで、むのさんは、僕が前回指摘したように、国家の条件を失っちゃったから、むのさんの言っている平和主義とつき合わせてみた時にこれは矛盾じゃないかって言うところを越えていくところをぼくたちが発見していかなくちゃいけないんだよ、言うところを本当はむのさんは言っている、だけどそこのところをむのさんの答えとしてむのさんが言っちゃうんじゃないくて、ぼくたちがまさしくそのことを自覚し、見つけ、平和を創りだす、そういう鋭意をぼくたちは作っていくと言うところに、そういうところにぼくたちはまだ立っていないんだ、いま。2023年たってもまだ立っていないんじゃないかって、その辺をぼくたちははっきりと見定めていく必要があるんじゃないかって思います。

●D.M.（男性）ちょっと今の話に補足したいと思うのはですね、私もこの話を聞いた時に、直接本人にいろいろ尋ねた経験があるんですけど、それでもよくわからなかった。それで最近は石井さんが話してたので少しだけ、それともう1つはですね話してくれてるな皆さんのプリントの中の愛嬌さんの話ってこれはその前の準備会の8月にあのお話ししていただいたところの最後の方に、ちょっとここのくだりが書いてあるんですけども、彼の話からすれば要するに侮辱だったってのはまあ憲法学者の間でも常識的な話であってそれはけして日本を褒め称えてやったわけじゃないんだけれどもっていうことはある程度常識的な話だっていうのは皆さん憲法学者の間でもある程度認知されてるんじゃないですか。従ってですね、父の言葉、ちょっと誤解を招きやすいのはですね、近現代国家として認められないってというようなことを言って近現代国家、うちの父自体は、近現代国家が最高の国家である、普通の国家であるとは何も言ってないんですよ。だから必ずしもそのこと自体がもうちょっと、さらに未来国家っていう形のこと言っていないんですけど、未来国家って、そういうようなものは軍隊はやらない国家が新しい価値観としての国家と求めて行ったときは、軍隊なんていらぬ、そういうようなことを考えてもいいんじゃないかっていうような将来的なことを希望的なことを言ってるんじゃないかなってそういうような思いを持ってあのお話を聞いてたんですけどもそういうような捉え方でいいんじゃないのかなという形です必ずしも近現代国家って、あたりまえの国家でそれがいいって言ってないんで、そういうような捉え方もとても大事なことだと思います。

●司会（男性）坂巻さんに前回お話をいただいたんですけど、この本『希望は絶望のど真ん中』の「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることの条件で有り、資格だ」って書いてある次のページですね、「憲法第9条にしても……、敗北者に対する死刑判決に等しい宣告の中に、自分たちと人類みんなの真実の喜びに至る道を見たであろう、そのことが、絶望のど真ん中の、そのどん底にこそ不滅の希望が輝いているんだ」っていうその題名の由来って言いますか、この本の題名の由来って言うことで、ですからここでいう憲法は、国家として認めないということより、その先にある「人類みんなの真実に至る道」、本当に戦争がなくなる戦争をなくすという風なことに気がついたっていう風なくだりがあるんで、そのことなんじゃないかなと思うんですけど、坂巻さんちょっとお願いします。

●K.S.（男性）みなさんおっしゃるとおりだと思います。今のお三方のご説明に加えることは私何もないんで、みなさんのご理解もこれで叶ったかなと思ったりしてます。強いて言えば、さっきのむのさんの未来国家とかですかね、そういうことまで、編集担当者としては、つまりそのいろんな想像力をめぐらせて、どう読まれるか、どう受け止められるかっていうことを考えるわけですけども、そのところをもう少し意識したら、むのさんにつまり読者にある種の戸惑いなり、でもしかして誤解なりを与えないためにですね、こういうくだりを加えたらどうですかという風なことを提案するべきだったのかもしれないというのが私の反省点ではあるんですけど、繰り返し読むと、それから前の本と、三年前でしたか、むのさんの発言全体を読み返す中で、理解は可能なんではないかなという漠然とした答えがすいませんけど、だいたいそんな感じを持っています。

## 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（6）

1:01:35

第1章の話に入る前に、前回の話のそのあたりの話について、石井さんちょっとお話いただけますか？

（石井・男性）今 紹介を受けましたようにですね。まあ9条2項、軍隊と兵器の所持はダメ あの戦争でやった日本 これに対して 手直しを課すということで、憲法9条に行こうっての突きつけられて、むのさんがそれに対して、近代国家の要件をなくしたって取られちゃった。だから 近代国家としては その条件を失っちゃったんだから これはちょっと 大衝撃のことでそのことについてはっきりと意識を持たないで僕も来ちゃったんだったってことを むのさん自身が言っているわけですね。（1:03:30）

ところがあの、その部分だけでなくですね、きょうの（第1章と）、序章あたりのところをつなげてそのことを考えてみるとですね。むのさん自身が、なぜ、人類ってのは国家を持って、そして軍隊を持って戦争するようになったのかってこと言ってるわけですね。そこを見ていくと、むのさん自体は、やっぱり軍隊を持って、近代国家を擁して、それをやっていけば一人前の国家としての星をなすんだよっていうことを言ってるんじゃないかと、やっぱりコスタリカもそうなんだけど、どういう風にすれば、非軍事化の本当に九条の精神が持つ そういう社会を作り出せるのか、そのことを考える時に、手放しで、九条を頂いたから、九条を与えられたからそれだけで平和はやってくるということではなくて、もっと人類がどうして 国家を持って そして自分と国の富をまうす ます増やし、さらにそれを守るために戦争をやってくようになってしまったのかっていうあたりをつなげてみるとですね、やはりただ与えられた九条っていうんじゃないかと、どのようにして本当に自分たちがどういう生活をしていけば 平和社会を、戦争を起こすことのできないような国にするかはできるのか、そして、本当の意味の与えられたってところの与えられた九条ですね、軍隊で、自分の国境を守って。自分の財産を守って自分の都合が悪かったら先制攻撃をやっていくって言う、そう言うんじゃない行き方をどのようにしたら可能なかっていうところが 1945年の8、15直後にですね、本当の総括をしてないし、本当に平和国家を築いていけばいいのかっていうことを、私たちは作ろうということの本気に一人一人が考えるという風にはなっていない、そういう受け身の九条を与えられたということに対する平和に対する警鐘ですね、これがむのさんの発言の中に込められていたと、このところをやはりぼくたちははずしちゃいけない、だから字面だけ読んで、むのさんは、僕が前回指摘したように、国家の条件を失っちゃったから、むのさんの言っている平和主義とつき合わせてみた時にこれは矛盾じゃないかって言うところを越えていくところをぼくたちが発見していかなくちゃいけないんだよと、言うところを本当はむのさんは言っている、だけどそのところをむのさんの答えとしてむのさんが言っちゃうんじゃないかと、ぼくたちがまさしくそのことを自覚し、見つけ、平和を創りだす、そういう鋭意をぼくたちは作っていくと言うところに、そういうところにぼくたちはまだ立っていない、2023年たってもまだ立っていないんじゃないかって、その辺をぼくたちははっきりと見定めていく必要があるんじゃないかって思います。（1:07:50）

1:08:00

（武野・男性）ちょっと今の話に補足したいと思うのはですね、私もこの話を聞いた時に、直接本人にいろいろ尋ねた私もこの話あの話聞いた時あ直接本人 いろいろ 尋ねた経験があるんですけど それもよくわからなかった。それで最近では 石井さんが話してたので 少しいだけ、それともう一つは ですね 話してくれてるな 皆さんのプリントの中のお嬢さんの話ってこれは その前の準備会の8月にあのお話ししていただいたところの最後の方に、ちょっとこのくだりが書いてあるんですけども、彼の話からすれば 要するに 侮辱だったっていうのはまあ 憲法学者の間でも常識的な話であって それはけして日本を褒め称えてやったわけじゃないんだけどもっていうことはある程度 常識的な話だっていうのは 皆さん 憲法学者の間でもある程度認知されてることらしいです。

従ってですね、父の言葉、ちょっと誤解を招きやすいのはですね、近現代国家として認められないってというようなことを言っていて近現代国家 うちの父自体は、近現代国家が最高の国家である、普通の国家であるとは何も言っていないですよ。だから必ずしもそのこと自体がもうちょっと、さらに未来国家っていう形のこと言っていないんですけど、未来国家って、そういうようなものは軍隊はやらない国家が新しい価値観としての国家と求めて行ったときは、軍隊なんていない、そういうようなことを考えてもいいんじゃないかっていうような将来的なことを希望的なことを言ってるんじゃないかなってそういうような思いを持って あのちょっと 話を聞いてたんですけども そういうような 捉え方でいいんじゃないのかなという形です 必ずしも近現代国家ってないんで、そういうような 捉え方 とても大事なことだと思います。（1:10:17）

1:10:20（花崎・男性）坂巻さんに前回お話をいただいたんですけど、この本『希望は絶望のど真ん中』の「交戦権と軍隊と兵器の所持は、国家であることの条件で有り、資格だ」って書いてある次のページでですね、「憲法第9条にしても……、敗北者に対する死刑判決に見たい宣告の中に、自分たちと人類みんなの真実の喜びに至る道を見たいであろう、そのことが、絶望のど真ん中の、そのど真ん中にこそ どん底にこそ不滅の希望が輝いているんだ」っていうその題名の由来って言いますか、この本の題名の由来って言うことで、ですからここでいう憲法は、国家として認めないということよりその先にある 人類みんなの真実に至る道、本当に戦争がなくなる 戦争をなくすという風なことに気がついたっていう風なくだりがあるんで、そのことなんじゃないかなと思うんですけど、坂巻さんちょっとお願いします。（1:12:02）

思ったりしてます 編集担当者としては つまり いろんな想像力を巡らせて読まれるかどう受け止められるわけですけども そのところをもう少し 意識したらば 室さんに妻にドクターにある種の戸惑い ですね こういうくだりを加えたらどうですか という風なことを提案するべきだと だったのかもかもしれないというのが まあ 私の反省点ではあるんですけど 繰り返し 読むと それから 前の本とのね その3年前でした数の人の 要するに 反対を読み返す中で理解は可能なんではないかなということ です 右側ですね

（坂巻・男性） みなさんおっしゃるとおりだと思います。今のお三方のご説明に加えることは私何も無いんで、みなさんのご理解もこれで叶ったかなと思ったりしてます。強いて言えばさっきのむのさんの未来国家とかですかね、そういうことまで、編集担当者としてはつまりそのいろんな想像力をめぐらせて、どう読まれるか、どう受け止められるかっていうことを考えるわけですけども そのところをもう少し意識したらば、むのさんにつきり読者にある種の戸惑いなり、でもしかして誤解なりを与えないためにですね、こういうくだりを加えたらどうですか という風なことを提案するべきだったのかもかもしれないというのが 私の反省点ではあるんですけど、繰り返し読むと、それから前の本と、3年前でしたか、むのさんの発言全体を読み返す中で、理解は可能なんではないかな という漠然とした答えがすいませんけど だいたいそんな感じを持っています。



## 資料⑥ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（7）

●（男性）今の問題に付いてこの新しい資料の9ページの右側ですね、下から二つ目、男性となっている、これ私のです。いまもってきている本の3年前に黒岩さんが聞き手をなさっている『戦争絶滅へ、人間復活へ』と言う岩波新書があります。そのなかに、わたし確かに一般論としては、死刑判決、屈辱であると言うことなんでしょうが、しかしもう一方で、道しるべと言うことで、理想のね、そういうものも、そういうこともあると、そういう意味で、そういうこともあると言うことで、新憲法の成り立ちということ、今ちょっと勉強しているんですけど、非武装中立というのは、マッカーサーの夢だったと、その後、東西冷戦の中で、考えはすぐ変わってくるわけですけども、せっかくですね、そういう理想の憲法ができなくて、まあ与えられたというか、で、本当を言えばその時点でここに書いてありますけど、日本人として今後ですね、そういう憲法9条の中で、どういう生き方をし、人類に対してどういう呼びかけをしていくのかということですね、本来は議論しなければならなかった、と。ところがむのさんは残念ながらその時にですね、気がつかなかったし、やるべきことをやらなかった。それが結果的に憲法をもらう機会がありながら、憲法を活かすというか、世界に働きかけることも含めて、できなかったと。その国をですね、むのさんはここで告白されてんじゃないかと思ってます。

●司会（男性）そのような形で前回は割とまとまって、それぞれ「分かんない」っていうことを言っていた人も納得いったという形で進んだかなと思います。そういった意味で、もう1つの本の『戦争絶滅へ』あの中のとくに憲法の二重性ということを読んでみる意味があるんだなと思ってここその部分だけ書き加えました。ですから、前回現れた疑問とそれに対する皆さんが考えたこと出し合って、一つの結論に至ったということでこの後に進めたいと思います。次はこの中の宿題っていうか、第1章、何かこれを読まれてお気づきのことっていうか、ここは割とよくわかるかとかそういったところの何か感心したようなところがありましたらちょっと出していただければと思うんですけども。

●D.M.（男性）全体的なことを話するとまたあれですけども、（この章は）非常にわかりにくい、それぞれこの章って言うのはいろんな、だいたい歳とってから書いた本で、自分の思いにいろいろのなあって、一つの章に整理して書いてくれればいいんですけども、それがなくて、思いがバツと全部がいろんなところに出ているから非常に読みやすすくない。ただ、さっき出てきましたけれどもみなさん第1章の41ページのところに書いてありますけれども、非常に一つのポイントとして、この章の全体のポイントじゃないんですけども、今、私たちここで議論していますけれども、若い人がいないですよ、非常に父が問題にしていたのは、要するに老、壮、青、少、幼とそれらがどう結びつけられるか、世の中の活力を起すためには、その結びつきがとても大事だってことが書いてありますけれども、この章の全体の人間の本性から見ていて、そのところが結びついていかないと、どうやったら若い人に訴えられるかっていうようなことがちょっと議論してもらえればと思います。この章自体はどちらかと言えば、石井さんがさっき話してくれましたけれども、全体からすれば要するに、戦争っていうのは農耕創始が始まってきて、その結果、富みが増えてきたところで戦争っていうの始まって、人類自体はもともと戦争はしないんだ、だから戦争なんか、やる必要はないんだ、戦争のない世の中はできるんだっていうそういう確信を持ってた内容の多分それが一番メインのところだと思います。

●H.I.（男性）ついでに若者の話が出たところで、僕が感銘を受けたのは、女性のことが出てきている。農業でも、自分たちの生活に関わる女性がですね、どんぐりとか、木の実とか、採集生活をやってたのが、自給生活、自分たちの食生活を安定させるっていうのをこれは企業的なことではなくてですね、自分の生活の中から女性が作り出していつている、それで10000年以降ですね、農業がすごく大規模になって灌漑農業が起こり、そしてそれを守るために古代国家が生まれ、さらにその蓄財を守るために戦争が起こるって。↗

それは何が中心になってやってきたかっていうと、男なんだね。男社会、ずっとそれがあつた意味、最近ジェンダーとか、女性の社会進出とか、そういう問題が取りざたされてますけれども、まだまだですね、男社会が展開されている。そして、戦争の時代が展開されていくって言うのは、まさしく男たちが作り出している。ところが生活のすごい基本的な不足を安定させる、子どもを産み、生命を継承していく、その中心には女性がずっといたと。今日、女性が参加しているんでね、僕は女性の発言をすごく楽しみ、この資料を読んだ感じの中からですね、女性の発言を聞きたいと思つているんですけど、まさしくですね、少子化の問題もそうですし、戦争の問題もそうですし本当に女性が生活の中からどう風に変えていくのか、政治をどう風に変えていくのか、女性が変わっていくのか、社会もどう風に変えていくのか、今ある1万年以降をずっと作り出してきた男社会の矛盾、汚点ですね、これを解決するところは今、若者の話を出てきましたけど、もう一つですね、僕は、むのさんがですね、女性のことをですね、非常に重要な問題としてこの章では採り上げていっていると思つます。

●R.S.（女性）こう言う世の中のことをじっくり考えている男の方たちの中で、へらへらと84歳になって、ふたりの娘と、ふたりの息子を育ててきました。『夫のボケは神さまからの贈り物』なんてものを書いたなんて言っている大人ですけどね、私はこの間立教大で『愛国と教育』というイベントがあつて、映画もあつたんですけど、あの映画、とっても私は刺激的だったのは、従軍慰安婦の問題がどこでも出て、そこでもそれを書いた日本書籍って言う私子どもの頃から世話になっていた出版社がつぶれたんですよ、ご存じですか。従軍慰安婦のこと書いて、それだけじゃ無いと思つですけどね、それで今出版界の中で「二の舞になるよ」って言つてすごく圧力があつて、そこに教育委員会なんか全部含まれてんですけども、ええなんでこんな従軍慰安婦のことがそんなにすごいことなのかなかって、私は高校生の頃から従軍慰安婦のことは思つてたんですけど、私はこれは、戦争になれば当然の行為であつて、これは13ページの一番上のところに書いてありますけど、戦争であれば当然する行為なんだろうなと思つます。それで私は息子もいますし、孫もいるんですけど、慰安婦の問題で朝鮮とオランダなんかは国を提訴してるんだけど、日本は、日本人の従軍慰安婦はひとりも国に提訴してないんですよ。で相当圧力があつたんだろうなつたことはもちろん分かりますけど、それに対して勇気があつたのかな、それとも一対一になつた時に、その優しさがあつたのかなって思つて、これってすごい、最終的には、男性と女性の1対1の場面なわけですからね。これってすごく根っこが深い問題なんだな、日本の女性は優しかったのかな、それとも、すごい圧力でどうしようもなかつたのか、もちろんそうだと思いますよ。けど一人もいなくて、よその国は（提訴が）、出てきているって、ちょっと何なのかなって、ちょっとその辺、女たちを支えてなかつた社会なんだろうと、そういう人を支える社会ができてなかつたんだろうと思つて、私は慰安婦問題、たかが慰安婦問題、されど慰安婦問題ってことで、私は高校生の頃からずっとそのことを思つてます。

結局、男性と女性の最終的なところが、そこに煮詰まっているわけですよ。私も今「日本人女性の出番」って言う本を書こうと思つて、取材かたがたこんなところにもでて来ているんですけどね。私はほとんどが、戦後、一番民主主義の、84ですからちょっと疎開なんかもしてましたけど、ほとんど戦争も苦しみをわからないで戦後のものすごく第一線の民主主義の教育を受けた人間でその後フェミニズムがあつてずっと(?)ですけど4人の子供がいたことでキャリアができてないで経済的自立つてあのフェミニズムの歴史の中からは自分では落ちこぼれちゃつたので、うじうじうじやりながらここまでやって来てるんですけどもね、結局やつぱり人類半分、女なんですよね。日々の生活、いのちとくらは、ほとんど女が支えてるんですよ。男って本当に悪いけど頭でかちで観念的で、そういつちやいけないうけど、女もバカだけど、男ってさうとうバカだよなって、この頃、だんだん過激になつて来てそんなことも言うようになってつちやつたんですけどね。

## 資料③ 第1回むのたけじ反戦塾（2022年12月18日）の記録（8）

私はあまりにも理念的であって、観念的であって身体性に乏しいと思うんです。で私もここに80いくつの方いらっしゃいますけど、いまここになってきていて男性の方が断然寿命が短い。ま、一生懸命働いてくださっているからだと思うんですけど、生かされているってことを勘違い、何か観念的で、運動をずっと男の人たちとやってきたのですが、何か身体性が乏しい、自分のいのちに対しての慈しみがなさ過ぎる、何かこう言う頭でっかちの理念的な頭のいいと言われる高学歴の方とか、政治家とか専門家とか科学者とかっていう方は本当に命に対して、自分のいのちに対しても慈しみがなさ過ぎるんじゃないかと思って、まあいい男ってどんな男かって、私は彼はすごくいい男だと思ってたの、幾人かいい男はいますけど、何か全体的にあまりにも観念的で、毎日の食事を誰が作ってくれてるんだって、ああいうほんと足元からの、愛って言うのかな、共生の理念って言うの。だんだんこの年になっていくと、まわりの男性は、ええって思うような男性ばかりですよ。幾人かいい方いらっしゃってがんばってますけど、やっと今小泉信三（？）と、田原総一郎が出てきたり、いくつか男性たちの中でも映画が出来ているんですけど、女性たちはいい映画を作ってますよ、ほんとにいい映画を。戦争に対しても原爆に対してもいろいろなことに対して。

私はあの、科学って言うのが、あまりにも頭でっかちで、生かされている、自然界の中の人間ということの位置がすごく乏しいように思って、私はエピジェネティック（？）というところまで、カネミ症被害支援センターをやっながらそっちまで行っちゃたんですけどね、エピジェネティック、遺伝子を作る勉強会をカネミ症被害支援センターをやっで、川尻先生（？）って専門家の男性の方のお話を伺ったんですけど、少子化の原因の半分は男にあると言うことをやっと認めはじめましたよね、少子化少子化って言うのもそれなんですよね、と言う話を聞いて、やっとそこまで男のプライドが、プライドを捨てるって言うか、そこまで降りてきてくれたかって思いました。ていうのはカネミをやっで、53年前の事件なんですけど、あの時 黒い赤ちゃんも産んだPCB食べて黒い赤ちゃんを産んだお母さんの方達を支援してたんですけど、そのとき「あなたは黒人の男とつき合ってるのか」って夫が言う、夫だってカネミ食べてるんですよ、そういうことを言った、精子（？）とかそういうものに対してのすごいプライドっていうかなんかすごいもの持ってるんだなと思ってそれが男なんだよ、その辺、やっぱり身体性がなくて頭でっかちで、観念的で、それが科学、科学なんて全て仮説の世界ですからね、私はどうしてこんなことを言うようになったかって言うのは、はじめの大学の時に、ソクラテスの「無知の知」と言う言葉を習ったことが、こんな風にわけの分からない世界に今いるんですけど。私は幾人か、好きな男性はいますけど、養老孟司さんはちょうど同い年だと。私は大好きですあの人。ああいう発想って言うのがあまりにもなさ過ぎるんじゃないかって、ごめんなさい。長くなりまして、こんなこと言わせていただくとね、来たかいがありました。

（男性）今のあの従軍慰安婦についての話がありましたけど、歴史認識というか、加害とすることを考える時に、従軍慰安婦の問題は大変重要なテーマですよ。従軍慰安婦の問題というのは、強制性という、軍の関与とすることで今いろいろと議論されているので、日本女性の場合はそういう点でどうなのかと、言うことだと思います。ちょっと私は今の方とは意見が違います。それからですね、この、むのさんの本の感想というか、私はむのさんの本読んで大変いいなと思うのは、自分の学習不足ということ、ここに無知とすることかいてありますけど、「私としたことが」というのを、あれだけの大変なジャーナリストが率直にですね、認めながら文章を綴っておられる、そのへんが大変ですね、むのさんの凄みを感じます。それから この第1章は人類学とか、考古学とかですね、私にしてみれば言われてみればそう言うことなんだなと、内容的にはそういう印象なんです。私は感心したというか、我が意を得たりというのは、41ページの前段ですね、過去を見つめ直して過去に学ぶことの大切さということが書いてあります。↗

まさに我が意を得たりということなんですけど、その努力は人類が現在ただいまの課題と取り組むのに是非必要だと、過去を学ぶことがですね。明日以後の課題と取り込むのもっと必要だと私は考えるからだと、これが今、私が、ちゃんとした問題意識を、行動するにしても、運動するにしてもですね、きちんとした問題意識を持つのにですね、さきほど近現代史を学び直すと言うことを言いましたけど、まさに今の私の姿勢とですね、これびったりと一致することで、我が意を得たりと言うように感じました。

●（男性）従軍慰安婦についてですけど、ソウルの日本大使館前に10年ちょっと前から年に3回とか4回行ってんですけど、何でかというんですけど、旅行を安くするんだったらソウル発にしたらまあ日本国内でさっき言ったの 北海道も沖縄も行けんですけどね、ちょうど8時羽田でやってるんで、その水曜集会在毎週あの大使館の前で水曜日の12時から始まるんですけど、それ見てたらですね、コロナの前までは1団体がやってたんですけど、1月にも2月にも行ったら4団体ぐらいに分かれて別々にやってるんです。一つの団体なんか、慰安婦像なんか、ブチ壊せと日本語で書いてるプラカード持ってる人もいたしですね、ちょっと私ハングル出来ないんで、1つの元々やってる団体に聞いたらなんかスマホで見せてくれて私達はこんな運動をしてますって、日本語で見せてもらったんですけど、大使館の前にあんな像ができて、それがもう10何年続いているのかな、水曜集會って、それがまあ、右翼に言わせたら国際法違反で大使館の前にあんなものを作ること自体がおかしいとか言ってるし 事実は事実だからというので、さっきも言ったように台湾に行ったら台湾にですね、やっぱり慰安婦とかあるんです、それは中華民国国民党がまあ、いまの蔡英文の民進党に対して嫌がらせか、ま 日本に対して嫌がらせか、ハヤシデパートって日本人だったらまあよく行く国民党の敷地内でどうしようもないんですけど、それを知らないで通るか、ああ言う事実があったんだな、いうことですね、我々日本人がどう対処するかと言うことで、私また見物するだけなんですけど、政権が変わってとくに日本大使館前がそういうふうに分かれていろいろ抗議活動をやっているのが印象にあります。

●司会（男性） さっき石井さんが提案されていた、この中の21ページですね、「女性主導の世へ、若者中心の世へ」ってことで書かれているところですけども、とくにこの章は、どうして戦争が始まったのかっていう前提のもとに書かれていて、それで古代の話とかそういうのからこう書き起こしている考え始めているってことなんじゃないかなと思ってまたまた、石井さんがおっしゃられたように私も、戦争を起こすのは男だっていう風に思っているんです。だから男はダメだとか、女がいいとかっていうことじゃないんですけども、やはり政治に、もともと国っていうものを考えた時ですね、むのさんの本にもありますけれど、国があるから戦争があるんだみたいなことと言えば、あるいはもちろん 資本の問題とかそういうことかがあると思えますけれどもやっぱりそこら辺とどこで何か変に期待しちゃう、女性が成長とか、もっと出てくればとか、そっいいながら抑え込んでいる側にいるのかもかもしれませんけれど、そのあたりで本当のところどんな風に考えてるのかっていうことがもし聞けるんだったらと思うんですが、それは男性の方も、女性の方には言いません、男性の方でもそのあたりをどういう風に考えているのかっていうことで、あるいは今、期待していることがどうなんだろうかと、それを阻んでいるものは何なのだろうかと、そのあたりもちょっと聞かせていただけたらと思います。

●R.S（女性） ごめんなさい年の功になっちゃって、わたしはやっぱりね。オスはメスよりも力、パワーがありますよ、体も大きいし、筋肉も違うし、オスって言うのは、マウントする生物ですから、生物見たってオスの方が断然強いんです、力が。その力を暴力とか、闘争とか、競争とかなんかが、そっちに使わせないように女がちゃんとすれば平和は保てるんじゃないかな、最終的には力のパワーはあるんですよ、それが今まで3000年のこれだけ、人類がはびこってきた歴史、人っている人類、人類=マンって言うてんですから。（次ページへ）



## 資料③ 第2回むのたけじ反戦塾（2023年3月12日）の記録（8）

人類は、マンじゃないんですよ、ほんとから言えば。でも人類＝マンで通ってきている世の中が3000年あるんですよ、それはパワーです、オスは私は当然オスって言う生物はパワーがある、動物界見たってそうですよ、それを国家とかなんかそういうものに結びつけちゃって競争とか、闘争とか、抑圧とかなんか そっちに持っていくのが、女たちが本当に出てかなくてはダメだと思うんですよ、それはやっぱりすごい教育だなあと考えてます。わたしは戦後のわりといい教育を受けてきたので、その辺をしげしげと見てんですけど、信田さよ子さんってずっとカウンセリングやっている方が、『家族、国家は共謀する』っていう本を書きましたよね。家族って言うのもその権化なんです。結婚、夫婦って言うものも。だから今の夫婦別姓にしてもなぜこんなに引っかかっているかというの、全部、男性のプライドがあるんですよ。私はそのプライドがどうかって言うんじゃない、その使い方、そこそこ、男性と女性がほんとに共生するようなコミュニケーションが、とって男性はコミュニケーションが下手だと思えます。雌の方が子供を育てるといふことのためにみんなに共生して子供を育てなきゃならないからそういうことを身につけているんです。男たちは1匹やって俺が俺の世界ですから、コミュニケーションがすごく不足している、だからこれから先はそのコミュニケーションのところで、何とか男は黙って札幌ビールなんて言っていないで、ちゃんとコミュニケーションを（という）「うるせいな」と「任せとけばいいんだよ」とか言う、その辺をセクハラにしても、パワハラにしても、家庭内暴力にしても、全部そこにひっかってくるのがあるので、この問題はもう、私は平和（なんかもう）何しに来たのって言って、けんかなんてしなくたって、何かできるんじゃないかなって、思うんですけどね。ごめんなさいね、観念的、感情的な話ですけど。

●T.O.（男性）全然読んできてないんで申し訳ないんですけど、700万年って言って、僕の感覚とは違うなと。ホモサピエンスが、アフリカから出たのが5万年っていわれているんですよ。今のほとんどの人類の祖先は5万年前にアフリカ出たホモサピエンスの子孫という、ほとんどって言う風に言ったのはね、ネアンデルタールという別系統のホモ族がヨーロッパとかに住んで、そこと混血はしてるんですよ。後は、立証はないんですけど、いわゆる北京原人とか、インドネシアのちょっと背の低い猿人とか混血はされてるんだろって言うこと、とやうと、それくらい多様な人類なんだろって、とやうと、我々って言うんですかね。普通に家族って言うんですかね、生活してる時の感覚、いろんなこと考えてということがどこまで遡れるのかなって言うところ、と、普通、文学って言うんですかね。さっきもギリシャの、ソクラテスの話も出てきて、少なくとも2000年はさかのぼって、共感できるだろうって言えると思うんですけど、何となくホモサピエンスの括り位ではと思うんですけど普通にしゃべれるんじゃないかなと、それはあの環境が違うから、そういう風に違いはあっても、普通にしゃべれるって言うか、考え方としては共有できる、言葉の問題もちろんあって、世界の人と共有できるかって言う言葉の壁はあるけど、全世界の人と、わかり合えるじゃないですか。言葉の壁がなければね。とやうなところの広さはもっているんだろって。でもそれはやっぱり50000年位前じゃないかなと、思ってます。

あと農耕が武力を産むって言う話をしてるんですけど、そこちょっと違和感があってですね。今でいう沖縄、ウチナンチューが国家を持つのが、1300年代のはずなんです、全然、だから国家がなくても人は生きていける、農耕生活は出来る、さらに言うとアイヌは最後まで国家持ってませんよね。だから普通に国家なんて言うのはなくて人が社会をつくれるって言うこと、それがまず根本にある、ならなんで国家があるかって言う、他民族を支配するための、暴力装置を持ってるのが国家作っているんですよ。つい最近、地球で、国家の国境というのが確定された、つい最近の話ですよ。300年前位になるとあの土地は誰の土地だって言うのも、決まってない、それを最初に領有権をしたのが、オレのものだというのが昨今言われている話ですよ。

と言う位、人の本質的な社会形成力っていうのは国家なんていないんだってところから話を始めないと武力の問題、戦争の問題、軍隊の問題っていうのはいけないうんじゃないかなという風に僕は考えてます。だからちょっと議論として女性が、軍隊を無くすんだって言うんじゃない、権力をどう解体するかって言うような議論じゃないと、戦争の話には行かないんじゃないかなと、権力をどう女性が解体するかとか、権力をどう我々が解体するかとかと言う議論じゃないかなと、思ってます。ちょっと発言させていただきました。

●D.M.（男性）その内容は、国家はいらないって言う内容は、この後出てきます。

最近日曜日、私、東海村の反原発の動かすのを止めさせるスタンディングに行ってきたんですけど、うしろの方でほけっとしてたんですけど、そしたら若い人がよってきたんです。「あなたがたは、原発の反対運動して、いいかもしれないけど、電気がなくなる」って言われたんですよ。私自身は、「いつまでもあんな危ないものに頼っていたら私たちの未来がなくなるんじゃないか」「あんな危ないものから抜け出して行くような、そういう未来を築いていかないと要するに日本の国家ってどんだん落ちていくんじゃないか」ってそういう話をしたんです。もちろんそれはあのデモのあれからすれば第2原発は古くて40年たって、それをなぜ、それをなぜ言えないかって私、別の理由があって言わないんですけど、そういうような話をしたんですけど、そしたら「あなたの方が先に死ぬんだから、未来なんて言うな」って言われちゃったんです。その時ちょっと思ったんです。やっぱりね、若い人のアピールする時には、未来を語ることが一番大事なのかなって、私たち反原発でも、どちらかというとながティブな、危ないからとか、そういう言い風な意見で、もちろん危ないですよ、40年も稼働させたものをまた動かすって、どこの世の中、40年稼働してて今、またこうやって活動しているようなものだから、自分のこと棚に上げて、再稼働するって言うのはおかしいなと思ったりして、そんな話はしたくないという感じで言ってたんですけど、やっぱり若い人に話す時には、私たち歳とった人たちで、どちらかと言えばネガティブ、危ないから稼働止めた方がいいとか、そういう言い方するんだけど、次の未来はこういうような世界を作った方がいいって、そういう意味では例えば軍隊のない世界を作るといふ話でもうちょっと具体的なそういうような若い人にアピールできるようなことをしていくことが、ちょっとやっぱり大事な問題じゃないかなって、そういうような思いをその若い人と話して感じました。

（男性）その若い人は、原発は賛成なんですか、電気無かったら困りますよね。じゃあ、安全性のことは言わなかったんですか？

D.M.（男性）安全性は無視なんです。今の生活しか、若い人は考えてないんです。今の生活で、困れば困るって言うような。

（男性）近くにあるんだったら福島のことを知っているはずだから…

D.M.（男性）でもやっぱり壮年層の人が稼働反対に対して反対という、アンケートを採るとそういう風な行動ですね。だからそこはね、非常に分断しているというか、ああいうスタンディングだったりすると、ああいう人が何人か出てくるんですけど。

●司会（男性）女性って言うことと、若者と言うこと、この本に出ていることの話が出たわけなんですけど、後の方に、この章の話の後の方に、「国際なんて愚かなこと」と言う章があって、ここはちょっと序章で言ってること、国って言うか国際っていうこと、まやかしてみたいなところについて言ってることなんじゃないかなと思うんですけども、ちょっと意見を、意見かお話を聞きたいんですけども、ちょっと時間ずいぶん長くなってしまったんで、一度、前回できなかった坂巻さんのお話を…、（休憩していいですか）休憩さきにしましょう。

【岩波新書編集者 坂巻克己さんの「むのさん」との話】

(花崎) 岩波書店にいた坂巻さんには、むのたけじさんの本を編集していた時のむのさんがどんなんだったかのお話を何うと前回はお願いしていたんです。けれども 前回はちょっとなんか 議論が白熱しすぎちゃって、お時間がなくなっちゃったんで 今回また来ていただいて、お話を聞かせていただくことにしました。よろしくをお願いします。

(坂巻) 私は12年前までちょうど40年間、岩波書店で仕事している中で、むのさんにいろいろお世話になりました。今お話に出た「戦争絶滅へ、人間復活へ」は17、8年かって、私が担当者として仕上げたんです。その上で「希望は絶望のど真ん中に」の方は、編集者として、要するに 企画を立案したり 社内的な手続きやったりはしているんです。ただ、この本は、そういうことより何より、本の中でもふれられていますが、むのさんと息子さんの大策さんとの会話というか、やりとりのなかで生まれたという性質もあります。しかも、私はできる直前に定年退職で会社を離れなければならなかったものですから、後輩に引き継いでいます。本作りで著者と編集者の関係でいうと最終盤が大切で、そこでやっぱり濃密なコミュニケーションというか、いろんな意見交換なんかもあるわけです。そこには私がタッチしていないということはいわゆる 担当者じゃないと言うことを申し上げているのです。

それでは、むのさんとの出会いからまず話しましょうか。まず、私がむのたけじさんのお名前、存在そのものを知ったのは、もう月日までもはっきり覚えていて、1967年8月15日です。私は、その当時、むのさんが卒業した東京外国語学校とつながりがある東京外国語大学の2年生の学生でした。その意味でも、そもそもご縁があったんですが、私はむのさんという人を知らないまま、ある集会というか、講演会に参加しました。その集会は九段会館の大ホールで、国民文化会議 が65年から主催して、毎年 行っていた「8・15集会」という講演会です。国民文化会議というのは簡単に言えば、総評に加盟している労組の文化活動、文芸的だったり、音楽的だったり、いろいろなものを盛り立てようと活動していたものです。代表が日高六郎さんとかがトップにいた時期が長いと思えました。

私は、中学高校生時代とブラスバンド一筋でラッパ吹きばかりで、政治にはおおよそ関心がない、まったくのノンポリでした。ただ、私が講演会に入ったのは、大学に入った66年という年が影響したと思います。ベトナム戦争において65年2月あたりからアメリカ軍による北ベトナム本土への直接的空爆が本格化し、68年まで実施されて、大きな被害をもたらしていました。それに伴い世界的な反戦運動が広がっていったところでしたから、新聞記事などの影響も受けて、「8・15集会」にふらっと入ったのでしょう。その集会は戦争と平和を考えるものです。67年の集会での講演者は、後で調べたら、10人のお方が話しておられました。大江健三郎さん 小田実さん 岡村昭彦さん 島本俊雄さんといった そうする方たちで、ベトナム戦争についてなどのお話をされたわけです。しかし、その中で、むのさんが、本当に知らなかったんですけど、やっぱり 圧倒的に強烈に印象に残ったんですね。何を話されたかは細かく覚えていませんけど、一番記憶に刻まれたのは、右手の指を立てて激しい 調子でおっしゃったんですけど、とにかく日本が今必要なのは国の独立だと言ったことです。日本が独立しているんではといったアホな私の受け止めもあったんですけど、佐藤栄作首相の発言をむのさんが怒って、そういう言葉が出たと思うです。ともかく、その時の迫力というか、本当に火を吐くような激しい調子で話された姿がずしんときたんですね。非常に気になる方になったんです。

私は、茅ヶ崎生まれですが、そこに茅ヶ崎ベ平連運動というのができたので、私はそこに加わることになります。その年寄りの人たちに「むのたけじさんという人はどんな人」と聞いたんですね。「むのさんに興味あるなら、理論社版の『たいまつ16年』があるはずだから、それを読みなさい」とか、「『新聞たいまつ』があるはずだ」とか、そういう話を教えてもらいました。それで、それを読んだんです。



\*むのたけじさんとお話をされる坂巻克己さん(右)

それから、「詞集たいまつ」が三省堂新書の第1号として出たばかりでした。その翌年かな、「1968年」という題で、むのさんと岡村昭彦さんとの対談の記録が、やっぱり 三省堂新書からできました。三省堂新書は、その頃ほんとうに素晴らしいものが出ていました。そういう本を読んだりしていると、やっぱり「新聞たいまつ」そのものを読みたいと思ったりして 購読申し込みをしました。

ずっととることになりまして、休刊になった78年までですね。それまでちょうど10年間は 一応 全部取ってあるんですけど、この最終号ってというのが これですね。なぜか、創刊号もあります。講演会かなんかで、むのさんがみんなに配ったのを取っておいただと思います。創刊号には、石坂洋次郎さんの文が入っていたりして、おもしろいです。

また、その当時、むのさんが応援する形でやられたものですが、大野さんという方がたいまつ社という出版社を東京に作って、月刊誌も出していましたね。また、たいまつ新書というの、そこから次々出ていました。

私は、むのたけじさんの著作や「新聞たいまつ」を読んだり、また、たいまつ出版のものを読んだり、読書会などにも参加したりしている中で、むのさんに惹かれていったし、たいまつともいろんな形でつながっていったのです。

それですとね 読者として受け身になっているだけでは満足できなくなりました。大学の遠い先輩ということもあって、手紙を差し上げて東京外語大で講演をお願いできないかということになりました。それで、思い切って手紙を差し上げて、講演を依頼しました。その返事が来ました。その返事をちゃんと取ってあって、今日持ってきました。私の自宅宛の手紙で、とにかく来てくださるということになりました。全部紹介する時間がありませんから、私が一番印象深い、今読んでもうんと思わせられる 下りだけ紹介します。まず、講演のタイトルについてですね。講演のタイトルは「現在についての感想」とします。つまり 68年という時は、ベトナム戦争だけじゃなくて 東京外語大も1年間授業がなく、バリケードストライキというある種異常な状況でした。そういう現在のことについて見方を語るということです。

それで何がこの手紙の中で印象深いかと言うと、「私自身は聴衆の少ないことを好みますが 人数には全くこだわりません」

というくだりがあるんです。多くの講演者は聴衆が多いと話しがいがあると思うので、そのときは変に思いました。ただ後から考えると、いかにもむのさんらしいと思ひ、わかりました。大勢の人に語りかけるのは大事なんでしょうけど、やり取りをすることをふくめて、中身の濃い、濃密なコミュニケーションを望んでおられるということがあとからわかりました。実際の聴衆の集まりは、大学祭の一環としてやったんですが、大学の講堂の半分くらい詰まって、まずまずの集まりだったかなと思います。いろんな話をされた中でいくつか 印象深いことあります。

まず、講演会は小さなサークルで呼んだんですが、講演会の前にサークルの人たちと最初に会った時に言ったことを思い出します。「きみらは外国語を目的として学んでいるのか、手段として学んでいるのか」ということを聞かれました。(次ページへ)

## 資料④ 岩波新書の編集を通して、むのたけじさんのこと (2)

私たちは、そういう問題の立て方をふだん全然してこなかったもので、みんな黙っちゃいました。これも後から考えると、いかにもむのさんらしい根本的なところを 実問われているんだなと私は思いました。目的として学ぶは、言語学者とか、言語を研究対象とする人には十分あるし、そういう学生もいるわけです。

同時に言葉を身につけてなんらかのコミュニケーションの手段として使うこともできるわけです。それにより外国の文化を知ることなどができるわけで、この場合手段として使うことになりま。だから、どちらの道を考えるのかで、根本的に姿勢が違ってくると思う。そういう意味で、実は根本的なところを問われていたのだという感じがします。

実際の講演では最初におっしゃったことは覚えているんです。それは何かというと その日むのさんはネクタイを締めてこられたんですね。私は普段 ネクタイ なんていうのは嫌いで、あんまり締めないんですよ。それで、そもそもネクタイとはどのようなことで生まれたのかと問いかけました。古代ローマ帝国の奴隷たちが何か印のために締めさせられたものだと言いました。私は気になってこのことが本当かを調べましたが、いろいろな説があるようです。ネクタイは明確には突き止められていないから、ローマ帝国の奴隷説もあるかもしれないが、その真偽はわかりません。だが、むのさんというのは、さっきの言語の話と繋がるんですけど、根本のところは気になるですね。その根本のところを問わねばという姿勢があるんじゃないかなと思います。

実際の講演の中でもいくつ忘れがたいのがあります。それは今の大学の学生たちの闘争は本物の闘争とは言えないって言われるんですよ。なぜ本物でないのかと言えば、歌が生まれていないというんです。歌が生まれないというのは、本当の闘争ではないというのは、これもまたちょっと非常にユニークな伝え方で、むのさんらしいなと後から思ったわけです。

確かに いろんな国で、いろんな社会運動の高まりの中で、いい歌が生まれたということはあったと思います。日本でもそうです。しかし、68年ごろの闘争の中で生まれた歌はちょっと なんか思い浮かばない。その意味で むのさんらしいちょっと面白い形で見ておられたのだなと後からしました。

その当時むのさんは52歳だったと思います。だから、とても若々しい精神のもちぬしだなとちょっと思いました。

イギリス、大英帝国なるものはもう完全に斜陽なんだけど、唯一希望があるとすればと言ってね、どこに希望があるかという、ビートルズだということ。僕らはビートルズが好きだったから嬉しかったんですけども、従来のロックだの、ポップスなのを打ちこわして、兎にも角にも新しいサウンドを作ったということなんでしょう。細かいことを議論しませんでした。あいうことに注目して、それが新しい可能性があるというのが面白いって、あまり知られてない一面かなと思ったりしました。

そういうことで、講演が実現して、むのさんに関心がますます強まってきたわけです。

それで後から考えて、むのさんに惹かれていったのは、二つにまとまると思うんです。

ひとつは今まで話したことと関連するのですが、要するに、いろんな問題、沖縄の問題、メディア、農業、教育、などいろんなことを語られたり、書いたりする一つ一つが表層というか表面的なことにとどまらないで、奥へ奥へと行き、根本のところへ問題を探っていく、そもそもどうなんだというような、そういう思考方式、そういうスタイルが、さっきのネクタイの話でもないが、とにかく非常にユニークで惹かれるところがあったというのがひとつです。これに関して、もう少し後のこと、1979年から81年にかけてのことですが、朝日新聞にコラムを時々執筆されているんです。それがご本名でなくて、匿名で、ひらがなで「た」と書いて連載していました。その中身は、要するにテレビ番組の批評です。むのさんがテレビ番組、ドラマとか、バラエティーとか、スポーツ中継までを取り上げて、批評されるわけです。紅白歌合戦なんかも取り上げているんです。一般的なこうしたテレビ批評は、面白かったとか、よかったとか、表面的なところで止まると思うんです。↗

むのさんののは、なぜこのような番組が出てくるか、メディアの構造とか、背景まで論じたりして、本当に深いです。むのさんがこれを執筆されていたのは60代半ばぐらいだと思いますが、こうしたものでも根本に向かっているというのが魅力のひとつでした。

もう一つのこと、論理立てる中身ではなく、使われる言葉、表現のスタイル、そういう文章の魅力といったものです。

本当に言葉を吟味しているというか、一つ一つを選び抜かれているとか、よく感じたわけです。一般のいわゆる 評論家とかジャーナリストは、いわゆる手垢に塗れたとかで表現されることが多いと思いますが、そういうものとまったく違うかたちで言葉を言葉として成立させるにはどうすれば良いのかをやっておられる方だなと思います。ご自身もよく言葉を問い詰めるのが私のテーマであると書いてあるくらいに 言葉 っていうものを大事にした方ですね。

これで見ると、さっき紹介した「詞集 たいまつ」という三省堂新書の中にも出てきます。「言葉を言葉として成立させるにはどうすれば良いのか、それを問い詰めるのが私のテーマである」と書いてあるんです。それくらい言葉として成立していないことが世の中に多いと危機感を持っていたから、そういう発想になったのだと思います。

それといろいろなところに繰り返し書いておられるのが、「一つ一つの言葉に全体重をかけて語れ」と読者に呼びかけるんですね。全体重を込めて言葉を語れているのはちょっとドキッとするというかですね。そう言われるくらい世の物書きと言われる人たちがその言葉を軽々しくというか、軽い言葉遣いであれこれ論じているというそういう批判があつたことだと思うんです。そういう目で見ると確かに新聞とか、雑誌とかで政治を論じているものでも、惰性に流れているとかですね、いつもの言葉使い、いつものロジックでやっているなという感じがあふれているような気が私はします。そういう意味で言葉というものを大事にすることに惹かれたのが 二つ目です。

大学を出て、岩波書店にはいって働くようになって、なんとかむのさんのお仕事を実現したいと思っていました。それまで岩波書店とのつながりはまったく接点がなかったみたいで、世界の中で7年の中で2回執筆をお願いしました。その時横手のお宅まで伺って色々教えていただいたり、ご相談させていただいたりしました。

2回のうちひとつは「日中関係について」について書いていただいた。これはここで紹介できる量ではないので、タイトルだけ言うと、「泥水で泥は洗えない」これもいい題だなとすぐ思いました。もうひとつは大学問題ですね。まさに大学闘争とか 大学紛争とか言われたあの事態をどう見るかという特集を組んだ時に頼みました。むのさんがつけた題は「村から大学を見ると」というものでした。これも、やっぱり大学論とか 学生運動論とかってそれは色々といっぱい出たわけですけども、都会のその大学教授とか、評論家とかが書くものと全然違う視点で村から見る大学論というものを書いてくれました。この二つが雑誌でのお仕事です。

その後私は、新書が多かったんですが、書籍の編集部に移りました。むのさんいはい何か新書をお願いしたいと思ひまして、どういうテーマを持ち出したら良いか悩みました。結局、1990年頃をお願いしたんですけど、私が考えたその当時のタイトルの案は「21世紀への手紙」という題でお願いしてみました。それはまあ21世紀が迫ってくるってそしていろんな課題がある。それこそメディアも、教育も、農業も、政治も、何でもいろんな課題がある。それをどうご覧になってその先を展望されるかっていうあたりを是非いろんな問題について 柱を立てていただいて論じていただきたいというふうなことをお願いしたところ、これは本当に心より引き受けてくださったんですね。

(次ページへ)



## 資料④ 岩波新書の編集を通して、むのたけじさんのこと (3)

しかし、実際には本当に難航しました。全国を講演されたり、執筆されたり、新聞作りをしたりしているわけですが。私との手紙とか電話とかのやり取りの中では、現状をどう見るかというところを要するに現状をどう見るかというところは書けそう。しかし、どうしたらいいかという言葉を使ったような気がするんですけど、どう解決し、克服への道筋がなかなか確たるしたものが自分の中に煮詰まらないという趣旨のことを述べていました。どう解決し克服への道筋に確たるものが自分の中に煮詰まらないという子を言われるのは、ひとつには社会主義という問題が1つはあるだろうと思っています。

若い頃には、レーニンとか、毛沢東にすごく引かれたってことをいろいろ書かれているわけですが、そういうことがご自身でどう振り返るかということも含めて、なかなか難しい、そう簡単には本は書けないということになったんだろうと思います。私としては95年の段階では戦後50年ですから、この年には是非出したいという思いがありましたので、随分強くお伝えしました。ということでそれを実現しなかったんです。

まあお願いしてから10年以上経ってしまうと、なんか無理かなと本音のところで思いかけていたところへですね。2007年でしたね。実は、むのさんはヒストリーライターと呼んでいますが、黒岩比佐子さんというノンフィクションライターがいるんですが、彼女が聞き手になってくれるならやれそうな気がするとおっしゃったんです。

黒岩さんという人は素晴らしい仕事がいくつもありますけど、もう残念ながら亡くなってしまおうんですけど、亡くなる前にとかむのさんのお仕事をということで頑張って本当に全力投球してくださったことになりました。

私と黒岩さんが横手にお尋ねして2日間にわたってインタビューをしました。ほとんどが黒岩さんが聞き手なわけですが、私は横で聞くような格好になりました。これですね。「戦争絶滅へ 人間復活へ」という最初の岩波新書ができたわけです。

「93歳 ジャーナリストの発言」というのが副題ですから、93歳の時のものです。これは非常にたくさん喋っていただいたし、黒岩さんのまとめ方も実に見事でした。整理して、いろんな形でむのさんとやりとりをして出来上がったものです。

これも実はほんのタイトルでどうするかということで、むのさんの前に黒岩さんとやりとりして、ふたりで決めた案は違うんです。自伝的な部分 要素を当然含みますから「戦争の世紀を生きる」でいいですねと2人で一致していました。それをむのさんにお伝えをしました。そしたら、むのさんから帰ってきたのが強烈だったんです。「そんなありきたりのおじょうぎの良い本なんか売れはしない」と。そして、悶えるような本、八方破れのような本にしたいと返事をくれました。これがなんとも面白いんですけども、悶えるような本って後から思うとこれはよくわかるんですけど、つまり さっきふれたレーニンや毛沢東に死刑判決を書きなきゃとか、それまでの思索の積み重ねがあったのだからと思います。そう言えば、黒岩さんと横手にお伺いして最初に言われたことも忘れ難いものでした。今までに書いたことも喋ったことないことを言うからね とも言われたんですね。ま、言われたことは、本当に色々ありますよね。今考えてみると、いままで書いていなかったことまで踏み込んでというのがあったのだと思います。ほんとうにいろいろあります。

端的にいうと、インドネシアの話、話題となっている慰安所のその周辺の様子だとか、そういうところまでリアルに語っておられるわけですが、まあそういうことを指してなのか、その他にもいろいろ新しいご発言があったわけで、ものすごい覚悟されたの発言と言えます。

いろいろな話が出る中で私が個人的自分が引きずっていることがありまして、184ページだと思うんですけど、「私は、宗教は宗教というものを否定はしないけれども、人類はもう宗教を卒業するときだ」というのを私はどう受け止めたらいいのか、と思っています。ア

キリスト教の人が多いのですが、やはりちゃんと宗教を抱えて、よく生きている友人がいるので、卒業するべきだというのをどう受け止めるべきなのか。

もちろん、一方で、オカルト宗教みたいなものも社会にあって、ネガティブなものもあるけれど、ポジティブな面もあるので、むのさんはどういう気持ちなのかどう受け止めが難しかった。

「99歳一日一言」でも宗教について扱った詞があります。初っ端の1月1日に、「拝むなら自分を拝め。賽銭出すなら自分に渡せ。自分をいたわれ。自分こそ一切の原点。」とあります。これはなるほどと思ったり、そう言い切れるのかなと思ったりして、私は渦巻いています。こうまあそんなことがそうですね

「戦争絶滅へ 人間復活へ」はインタビューで作られたもので、私は、やっぱり書き下ろしを考えていたので、すこし複雑ふくざつです。そのやり取りで3つ示されました。一つ目は「資本主義の崩壊」

2番目が具体的で、14歳の少女と70歳の人類学者の手紙のやり取りという形式で小説を書きたいとおっしゃっていました。それは人類へのラブレターになるはずだという言い方をされていました。3番目には「詞集たいまつ」というのがありますが、三省堂新書の後、評論社から6冊も作られました。新聞たいまつに書かれたのがベースになっておられるでしょうが、そういう形式を踏まえながら、短い、本当に見つけた言葉で大事なことを1冊の本にまとめたいというようなことをおっしゃっていました。

その3つがむのさんが提案されたことですが、個人的には小説にひかれていました。むのさんはどんな小説を書いてくれるか、と思っていましたけど、いろいろな経緯がありまして、先ほど話した「希望は絶望のど真ん中」は、資本主義の末路を含んでいるわけで、ある意味では1冊目のものに近いんだろうと思います。それができる少し前に退職しましたので、直接の関わりはないです。

あと時間もないので、二つほど付け加えさせていただきます。ひとつは雑誌の世界ですけど、2000年の3月号世界で、佐高さんがインタビューになって憲法について聞いておられるんですけど、これの中でむのさんが「憲法は 雑巾のようにつかわなきゃ」という言い方をされているんです。雑巾のようにという、普通の粗末に扱うことのようなイメージになりやすいけど、そうじゃなくて暮らしの中で窓を拭いたり、廊下を磨いたりするような日常生活するように、憲法を使いこなすことが大事だ。護憲派は神棚に祭り上げているのではないか。大事に飾っておいていいものではないぞという意味で、憲法を雑巾のように毎日使わなきゃと言われた。すごく面白い、いい言い方されるなと思いました。

もうひとつはむのさんの語り口です。今ネットで動画がいろいろなものが見られると思いますが、東京外国語大学の当時の学長がインタビューしているのが一つあります。追悼むのたけじさんというタイトルになって今ホームページで見られます。この学長のインタビューのなかで、むのたけじさんが卒業する年に2.26事件がおきたので、卒業式がなかったことを話します。そのために卒業証書もらっていないということで、卒業証書もらうことになったのです。さらに、現役の学生が武野さん位話を聞くというのもされます。

二つ動画で見ることがができますので、もしご興味があればごらんいただきたいです。もちろん、こうした会話の中でむのさんの学生時代の話で、おもしろいものがあります。東京外語にはご劇祭というのがあって、専攻の言葉で劇をするというのが大学祭の習わしであるのです。要するにスペイン語劇をやった時に、当時女の学生がいまから、その女性役をむのさんがやったのです。そんな写真も見られます。余計な話ですが、ご紹介したいと思いました。そんなところで終わりたいと思います。

(花崎) どうもありがとうございました。

## 資料⑥ 「揺るぎなき民意が戦争を止め平和をつくり出す」

### 揺るぎなき民意が戦争を止め平和をつくり出す 「コスタリカの非軍事化」を読んで

石井碩行

私がこの文章を読むことが出来たのは内田知行さん（注）に Jewish Eve Lipton & David P.Barash 「STRENGTH Through PEACE」（平和を通じて培われた力）Oxford Univ Pressに収録されている第3章 Costa Ricas Demilitarizaion 「コスタリカの非軍事化」の部分を翻訳していただいたお陰である。

コスタリカが軍隊を持たずに平和国家を営んでいることは、広く知られている。しかし、コスタリカという国がどのような過程を経て「非軍事化」を成し遂げたのか、その体制を維持することが出来ている要因がどこにあったかについては、十全に周知しているとは言えない。私たちがこの熱帯の小国から学ぶべきことは少なくない。今日、ロシア・ウクライナ戦争の悲惨な状況は私たちの気持を黒雲で覆い包んでいる。そして今もって出口の見えない毎日を過ごす中で、平和に向かう道筋は何処に求めればよいのか。有効な決め手を得ることは至難の業であるが、「非軍事化」がなり立っている国が現存しているとすれば、そこに注目してみるのも一つの手掛かりになるのではないかと思う。わたしは結ばれた糸を手繰り寄せるようにしてこのテキストを読んだのである。

コスタリカは19世紀初め（1821年）スペインから独立した。そして、ホセ・フィゲレル・フェレルが1948年（20世紀）12月1日に「コスタリカは今後軍隊を持たない」を宣言するに至ったが、その道のりは平坦なものではなかった。

初代大統領ホアン・モラ・フェルナンデスは「平和を愛する労働者や職人達からなる『市民軍』があれば十分」と考える民主的な考えを持っていたが、周辺の中央アメリカ諸国では血みどろな政争や内戦が繰り返され、公的な軍隊を持たないで国を維持していくことは並大抵のことではなかった。

それでも、コスタリカは自国の農業政策を軍事に優先させて政治的な自治を築いていったのである。しかし、この国を脅かす荒波は後を断たなかった。

象徴的な事例として、1955年に起こったアメリカ人のウイリアム・ウオーカーによるニカラグア政府転覆の事件のことが詳細に述べられている。ウオーカーは捏造した「帝国」を中央アメリカ全体に広げ、アフリカから輸入した黒人を南米の奴隷所有国に売りつけることを意図していた。

ウオーカーの侵攻は当然コスタリカに及んだ。コスタリカには常備軍はなく、召集された2500人あまりの人々は農具を武器に変えて応戦したのだ。そして、農民たちのもつ「生活を守ろう」とする意志がウオーカーの軍隊をニカラグア国境に追い返してしまうのである。戦場となったラ・カソーナ村は今日「サンタクローズ国立公園」となっている。常備軍を持たない農民たちの勝利は今なお語り伝えられている。

20世紀になっても、ラテンアメリカでは軍事クーデターが多発した。そして、コスタリカが1948年に味わった試練は国家存亡をかけての分水嶺と言えるものであった。

この年はカルデロン対ウラーテ・ブランコの大統領選挙が行われた。権力を巡る両方の泥仕合は殺人事件まで巻き起こしている。その混沌に決着を付け、非軍事化への道を開いたのは、ホセ・フィゲレス・フェレルであった。彼は700人の非正規軍を擁し、44日間の内戦をもって勝利し、大統領に任じられることになったのである。

ともあれ、コスタリカの「非軍事化の旅」を辿る時、フィゲレスの巧妙な手腕を除いて考えることは出来ない。

彼は、あらゆる権威主義政権の打倒を目指しながら、闘ったが大統領に就任すると、「共産党の非合法化」を断行したのだった。彼の正体は「何処にあるのか」である。この頃の時代に目を向けてみると、まさに世界は冷戦の間只中であつた。そう、マッカーシズムが吹き荒れる中で、中央アメリカはコンドミニウム（共同管理地域）に位置していたのである。彼は巧みな情勢判断のもとに「共産党の非合法化」を盾にして、共産党の政策綱領の多くを反映した社会経済改革を採用したのである。

結果、短期間に全国規模の社会福祉制度が確立された。公教育が憲法に基本的人権と指摘されているだけでなく、読み書きの出来る男女には選挙権が与えられたのだ。834種に及ぶ様々な改革が成就された。驚異である。そう、そして、なによりも、フィゲレスは1948年12月1日「コスタリカは合法軍隊をもたない」と宣言したのである。兵舎は首都サンホセを見下ろす丘の上に建っていたが、その兵舎は美術館に作り変えられることになった。

フィゲレスの建てた金字塔には目を見張るものがある。それでも、以降、外国勢力を後ろ盾にした元大統領カルロデンによる再度にわたる反撃があつた。21世紀になれば、ジョージ・W・ブッシュによるイラク戦争同意に向けての圧力が掛けられてきた。『非軍事化』の道は実に険しいものであつた。しかし、コスタリカの人々は国際社会への信頼と期待感を捨てることなく、困難を打破してきたのである。彼らは冷静に判断している。何事にも、オールマイティはないにしても、健全な社会生活を営むことの信念を持って、国民が力を合わせて乗り切っていくべきを知っているのである。

テキストの中にこんな件がある。「軍隊を廃止したからと言って、すべてが解決できるわけではない。しかし、戦争や軍隊のために使われる1ドルと、教育や保健医療や環境保護や衛生事業やインフラのために使われる1ドルとは異なる。」彼らは死ではなく、生のための方法として引き続き「非軍事化の道」を邁進することの大切さを良く知っているのである。日本が大軍拡へ転換している今日、コスタリカの人々の生きる姿勢と切実な外交努力に比して、軽はずみなこの国の政府の実態があげすけに見えてくるのを押し止めることは出来ない。

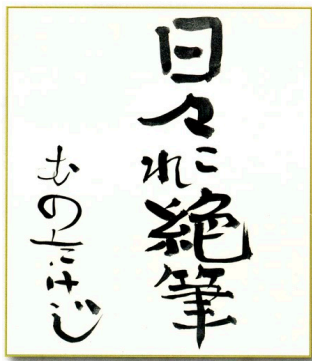
（注）内田知行（うちだともゆき）1947年生まれ。「東久留米グループ中国大好き」会長（日中交流団体）元大東文化大学（中国現代史）著書「歴史家が語るガイドブックにない世界の旅」編著「アヘンからよむアジア史」など

\* 3月12日の反戦塾の中で石井さんが紹介された『比企丘陵から』108号（2023年2月25日発行）の文章「揺るぎなき民意が戦争を止め平和をつくり出す」を転載させていただきました。



特集 **戦争の「盾」**  
 ～ジャーナリズムの責任～

はじめにおわりがある。  
 抵抗するなら最初に抵抗せよ。



最終号

\*3月12日の反戦塾の中で武野さんが紹介された『Journalism』最終号108号(2023年3月号)の記事「『戦争は止められる』父むのたけじの遺志を継いで」の中から、この「むのたけじ反戦塾」が紹介しているページを転載させていただきます。

【反戦塾でいただいた参加票(アンケート)から】

- また違った映画を見せて欲しい。武野さんのことをもっと知りたい(K.S.)
- 歴史修正主義があったことを、無かったことにしている。例、1937年南東大虐殺はなかったこととしてアパホテルの各室に本が置いてある。(F.O.)
- 2013.5.3有明のスピーチの迫力が強く印象に残り、気になっています。その年になくなったのですね。(M.C.)
- 何より《手元資料》が大変に有り難いです。その時、その場において、話を聞いていても記憶が曖昧だったり、ききまちがいをしています。資料の記録を読むことに新たな気付きもあります。スタッフの不断の努力をムダにしないために私も少し頭を働かせねばと思っはいるのですが。(K.Y.)

行っていることが気になります。父は米中露が直接戦うことを想定していましたが、私には米が近隣国を巻き込んで中露を押さえ込もうとする、時間をかけた大きな企みの一環であるように見えて仕方がありません。父は、日本をはじめとした東アジア諸国と欧州各国がこうした動きを牽制することを期待していましたが、米国の思惑はないか。そう考えると、戦争の構図は少し変わって見えますが、やはり父が恐れた第3次世界大戦の道を歩んでいて、しかも日本も巻き込まれる道ではないかという恐れを抱きます。そこで、自分も何か行動しなければならぬと思っていた時、憲法を考える映画の会をしている花崎哲さんから、むのたけじの考え方を知りたいと申し入れがありました。私は、16年5月3日の憲法記念日に東京臨海広域防災公園で開かれた憲法集会での父の発言録などを渡しました。それらを読んだ花崎さんからこうしたものをみんなで勉強する学習会を作りたいと提案されました。昨年、3回ほど準備会をして、年末の12月18日に1回目の「むのたけじ反戦塾」

を開きました。30人ばかりが円形に座って、憲法九条をめぐる話や今の時代状況などについて大いに議論をしました。第2回の反戦塾は3月12日に予定されていますが、何らかの提案をできればと思っています。最後に、活動を続ける上で大事にしている父の言葉を紹介します。これらは、父が最後に公の場で話した16年の憲法集会での発言で、父が訴えたかったエキスが詰まっていると思います。父は冒頭、三つ目のことを話すといいましたが、実際は二つしか話していません。そこで、私が前もって聞いていたことなどを参考にして三つ目のことも推察してお伝えします。一つ目「戦争とは常識では考えられない狂いで、どの軍隊も敵の国民をできるだけたくさん、早く殺せ、そうすれば勝てるというものです。このような社会正義のないもので、人間の幸福が実現できるわけがない。戦争はなくさねばならない」。これは父の体験でなくとも、今

行われているウクライナ戦争を見ていてもわかります。二つ目「さまざまな戦争をやって残ったのが憲法九条です。憲法九条には別の側面があるが、日本国民は人類に希望をもたらすと受け止めて大事にしてきた。その結果、戦後70年間、自国民の誰も戦死させず、他国民の誰も戦死させないという素晴らしい結果を残した。これが古い世代にできた精一杯のことで大事にしてほしい」。そして、三つ目は、「黙祷では誰も気がつかない。声をあげて、口に出して言わないと、誰にも伝わらない。思いは声に出して言おう」ということです。そうした言葉を、ジャーナリストたちがきちんと受け止めて報じてくれば、戦争だって止められるのではないのでしょうか。戦前、報道機関が軍部に圧力をかけられた時に人民のことを思って毅然と対応していれば、太平洋戦争だって止められたかもしれない。父は、そう話していました。



## 資料⑦ 「100年インタビュー ジャーナリストむのたけじ」 これまでの「むのたけじ反戦塾」のあゆみ

### 【100年インタビュー ジャーナリストむのたけじ】



俺のやれることは 新聞しかないから  
ちっちゃい新聞っこ作るぞ  
その新聞のタイトルは『たいまつ』だって  
真っ暗だから  
国民に向かってきちっと  
われわれ考え直そうじゃないかと  
新聞自身の態度もひっくるめてね、  
国民に向かってこうしようじゃないかと言えるような、  
それが本当のジャーナリズムだと思う。

(番組冒頭に現れる むのたけじさんの語り)



「今回のゲストはジャーナリストのむのたけじさんです。むのさんは昭和初期戦争の時代に新聞社に入り、従軍記者としてアジアの戦場を目の当たりにしました。しかし、終戦のその日にジャーナリストとしての戦争に対する責任を感じ、新聞社を辞めて、ふるさとである秋田県横手市に移ります。そして自らの手で、週刊新聞たいまつを30年間出し続けました。

日本は地域から生まれ変わる必要があるから常に生活者の視点から日本の姿を見つめ、鋭く深い思索に裏打ちされた言葉を紡ぎ出してきました。96歳の今もむのさんは戦争のない社会の実現に向けて言論活動を続けておられます。今回はジャーナリストとしての戦争体験、そしてむのさんの描く希望のありかはどこにあるのかを伺います。」

(番組冒頭の有働由美子アナウンサーによる むのたけじさんの略歴の解説より)

「100年インタビュー」2011年8月14日放送・90分

### これまでの「むのたけじ反戦塾」のあゆみ

\* 今回の討議の「8月『拡大『むのたけじ反戦塾』講演会』企画のための意見の出し合い・練り合いの参考にこれまでの「むのたけじ反戦塾」の歩みを振り返ります。講演者やゲストなどを考える参考まで

2022年3月21日 (休)

むのたけじ 地域・民衆ジャーナリズム賞 受賞の集い  
プレ・イベント「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズムとは」映像とお話の会

- 映像：『むのたけじ100歳の不屈 伝統のジャーナリスト次世代への伝言』
- お話：今に生きる『たいまつ』の姿勢と思想  
評論家 佐高信さん

2022年8月21日 (日)

戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ—むのたけじと考える憲法—

- ① むのたけじは訴える(その番組・映像から)
- テレビドキュメンタリー番組上映 『まだ101歳むのたけじ—戦争を殺す日まで』
- 映像上映「2016年年憲法有明集会での、むのたけじさん反戦の訴え」(10分)
- 報告「むのたけじさんの著作 映像 インタビューから『今に生きる反戦の思想と行動』を学ぶ」武野 大策
- ② 「私の思い、みんなの思い」「あきらめることをあきらめて」それぞれの考えを出し合う
- おはなし「いま戦争と改憲の危機に、私達は何をどのように闘うか」佐高信さん 中垣克久さん 愛敬浩二さん 阿部美砂さんほか
- 「むのたけじ平和塾」のよびかけ

2022年10月10日 (休)

『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』上映会&  
戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ「むのたけじ反戦塾」設立準備会

- ① 映画『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』  
「映画制作の現場から知ったむのたけじ、笹本恒子のシゴト」おはなし：河邑厚徳 監督
- ② 「私の思い、みんなの思い」それぞれの考えを出し合う
- 「むのたけじ反戦塾」の構想とよびかけ
- 「むのたけじ反戦塾」に寄せて
- 自由討議「私の思い、みんなの思い」それぞれの考えを出し合う
- 「むのたけじ反戦塾」参加者募集

2022年12月18日 (日)

第1回むのたけじ反戦塾

- ① むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』  
序章「歴史の歩みは省略を許さない」から (P.3~26)
- ② この「学習会」の進め方について
- ③ 参考映像『NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったのか」(第3話 熱狂はこうして作られた)』

2023年3月12日 (日)

第2回むのたけじ反戦塾

- ① 自己紹介(それぞれの考えを出し合う)
- ② むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』  
第1章「現在を刺す七〇〇万年の歩み」から (P.27~54)
- ③ トークゲスト：  
岩波新書の編集にあたられた坂巻克己さん
- ④ 参考映像 NNNドキュメント『シリーズ戦後70年 100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対』
- ⑤ フリートーク

2023年7月6日 (木)

第3回むのたけじ反戦塾

第2章 農耕の中から何ゆえに戦争が?

ところが次の朝早く、なんとまあさわやかな合唱が草原の風に乗って響き渡るではないか。わずか五〇〇メートルほど離れた原っぱで、六〇人ほどの中国の少年少女が、青空の下を教室として歌ったり踊ったり、地面に文字を書いたりしているではないか。中国のおとなたち、自分の親たちが何を考えて、何を求めて日本軍と戦っているかと子どもたちは子どもの感覚でキチンとわきまえて行動していると見えた。指導している数人の女性教師たちの服装は、私の目にはこれ見よがしにあでやかに美しく、それにも中国人の意志が表現されているようだった。……これは、それから四年後のことだが東京の小学生たちが疎開している山梨県へ私は記者として取材に行った。子どもたちは東京から来たオジサンだ、と私にまつわりついて、「東京に帰りたい、母さんのところに行きたい、なぜぼくたちはここに居るの? なぜここに居ないといけないの? 富士山の上まで往復したら東京に帰してくれと言おうなら、ぼくたちはすぐ富士山に登ってくる」とポロポロ涙をこぼしていた。……中国と日本との違いについて、この先は言わなくてもよいでしょう。

読者に配った中国の地図は、主要都市を日の丸で囲ってあったから、あたかも中国の土地はみな日本軍に統治されているみたいな印象でしたが、実際は日本軍が中国の大きな手のヒラに乗せられていた。

こんな状態の中で日本軍が新作戦を計画すると、中国側はあらゆる手を用いて、日本軍の行き先をキャッチした。すると中国の軍隊と民衆は、日本軍のやってくる直前に、狙われた都市の一切の建造物を解体して谷間などに隠してしまった。井戸も便所も、みな壊して使えなくしてしまう。日本軍の作戦行動は一個連隊三五〇〇人を単位としていたから、作戦対象は人口二十万人以上の都市となる。そこに到着した日本軍は、アンペラ(筵)をテント代わりに張りめぐらして暮らすしかなかった。

東安という町で、そういう状態に置かれていた連隊は、なんとまあ、九段坂が本拠の有名な近衛連隊でした。天皇をじかに守るはずの近衛連隊が、二・二六事件で反乱軍の立場に追いやられ、将校たちは銃殺されたが、一般の兵士は除隊を許されぬまま、戦死率の高い中国の前線に送られている、という噂が国内に広まっていた。その噂は本当かな、と私は冷たい思いを抱いて、アンペラ・テントの片隅に寝かせてもらった。

<MEMO>

村を守らないと戦争をやり続けることができないところまで日本の内情が来ていたのか、と私は考え込んだ。そのことを記者の仲間たちや県農業会の人たちなどと語り合っただけに検討したい、せねばならないと思った。しかし、そう思えば思うほど心が足踏みを続けた。世の中の大事な問題であればあるほど、それを世の中に持ち出すことにプレッシャーがかかる、そんな雰囲気は戦争中の社会に立ち込めていた。新米の記者にとって、何もかも勉強でした。

私の勤務地ですが、秋田支局の二年に続いて栃木支局で約一年のあと有楽町の報知本社の社会部勤務となった。そしたら一九四〇年八月に中国行きを言われた。三週間分の旅費を出すから、好きな所を訪ねてレポートを書けというものなんです。その時の私は、日中戦争はホントはどうなっているかを確かめたくて、うずうずしていた。だから大きなボートを買ったつもりで、早速に北京へ行った。すると国技館の大相撲が出張興行をしていて、ふんどしを肩にした力士たちが市内のあちこちを下駄履きで歩いていて、翌早朝に北京を去って、私が強い関心を持っていた内モンゴル地区に行った。張家口から貝子廟へ、包頭へ、更に日本軍の最前線へと歩き回って一〇日ほどしたら、日中戦争

日中戦争が日本側の言う「北支事変」(盧溝橋事件)で第二段階に突入したのは、一九三七(昭和一二)年の七月七日だ。その時に私は東京外国語学校を卒業して新聞記者となつて二年目で二三歳、報知新聞社の秋田市の支局で働いていた。支局の規模は支局長と記者二人。その新人記者として、その日はいつも同じく市内各所へ自転車で行き、出掛け、原稿を書いたあと、三人の原稿をまとめて秋田駅へ行き、上野行き急行列車の荷物係に委託した。この仕事に何の変化もなかった。前日そのまま、翌日もそのまま、本社から秋田支局への特別の通達、連絡のたぐいは何も無かった。戦争は、国民生活の中で全く情性化していた。その時に私の関心事は「農村警察官」のことだった。

すでに都市では、工場労働者たちのストライキが消えていたが、東北の農村では小作争議が依然として続いていた。時折の不作に米価の下落が重なって、小作農民たちは小作料の減額か免除を求めて地主と戦い続けていた。そういう農村に内務省は特別の警察官を配置した。小作人の側に立って小作人側の勝つように応援するのが任務だった。

明治元年以来の歴代政府で、地主对小作の戦いに小作側を警察官に援けさせるなんて前代未聞だった。そうまでしないと農村を守ることができず、兵隊の主な母胎である農

まともな世に造り変えるため、お互いに命を大切にすべて頑張っていくだけで。無論おれもその一人として努力し続ける。では日常不断の仕事では、どのように心掛けるか。ホントをホントと言え、範囲でホントを言い続けていく。

お待ちください……と、この本を読んで下さっているあなたに言っているのではなく、ペンを動かしている私自身に、「待て!」と言わねばならぬペンをやめてしまった。中国の戦況に対する私の判断は何を論拠としたか、その証言を省いたまま一気書き続けてしまいました。興奮すると、九六歳にもなつてこんなペンをやる。ごめんなさい。改めて証言します。なぜ、日本は決して中国には勝てないかと判断したか?

中国の現地を歩いてみると、日本軍は、なるほど、主要な都市を占領して、そこに一万か二万の兵隊を置いて、そこを支配している形を作っていた。しかしながら、主要都市を結ぶ長い線、線のまわりに伸びる広大な面は、みな中国側が支配していた。点と点を結ぶ線を作る日本の軍用トラックに乗せてもらうと、程なく行く先々にロシアが上がつた。中国軍が「いま日本軍のトラックが行くぞ」と知らせ、何が乗っていて、襲撃するに値するか否かを指示しているのだ、と日本兵が言っていた。日本国内で新聞社が

に対する私の判断ははっきりしていた。中国の政府も民衆も日本国に屈伏して要求を聞き入れる日は決して来ない、その可能性はゼロよりゼロだ。つまり日本の政府・軍閥が中国に勝つ日は絶対にあり得ない、と。

中国の実情を見て、いま述べた判断に至ったわけをありのままに報道して日本の国民みんなと政府と軍部に反省の材料として提示するのが、日本国民としての私の務めであり、ジャーナリストの責任だ。それを痛感すればするほど、それを実行出来なくなる。私が記事を書いて送稿しても、新聞社は紙面にのせないだろう。もしのせれば、新聞社と関係者全員がひどい目にあう。なぜなら戦争体制は、自分らの主張と行為に弓を引くものは、すべて利敵行為だ、国家への反逆として極刑で処理する用意をしているからだ。そんな仕掛けにはまるのは愚の骨頂だ。

じゃどうする。中国から日本へ帰る輸送船の甲板で、私は自分の決意を改めて自分に言い聞かせていた。「――真実であれ事実であれ、それをねじ曲げてウソを書いたり言ったりすることは、決してやらない。万一それをやらねばならぬことに身を置いたら、その時にはペンを砕いて捨て、口を閉ざして聞かない。真実を真実と言えない世なら、



は敵対勢力を撃滅するためなどは通常の戦争目的だ。裏面の用途は主に謀略のためだ。政治工作を隠したり、自分らの失敗をごまかしたり、民衆の権力に対する不満を抑えたりするために、わざと戦争状態を工作してごまかそうとするなどだ。

二〇世紀になってからは軍事上の理由はないのに、資本主義経済の行き詰まりを救うためにしばしば戦争が用いられた。資本主義の悩みは、商品が売れないでストックされて山積みになる状態だ。戦争の開始は、人為の方法で大消費を促進する。だから「アメリカ合衆国が不景気になると、世界のどこかでイクサが始まる」と言われた。アメリカ合衆国にとって、四パーセントの失業率は平常ラインだが、それが八パーセントになると赤信号だ。朝鮮戦争も、ベトナム戦争も、中東諸国での戦争の際にも、アメリカの失業率が八パーセントになった時に、まるでハンコで押したように、その時に始まった。

けれど二一世紀に入って、情勢は変わった。資本主義の構造が壊れてしまつて、その苦悶は戦争では救えなくなった。アメリカの失業率が九パーセントをオーバーしても、それだけでは戦争は起こらなくなった。そして、あちらの国も、こちらの国も、多くの

〇〇〇件を数えた。戦争が無い世の中が駄目になるというのは、その考え自体駄目だ。

(四)戦争行為はいま、どの国家にも固有の権利であるようなツラをして横行している。しかし、戦争をそのようなものとして公認した国際司法裁判所や国際会議の手続きは皆無だ。

戦争を肯定したのは、クラウゼヴィッツ(一七八〇—一八三一)というプロイセンの職業軍人だった。彼はいくさ上手だったそうだが、経験を『戦争論』にまとめて出版した。その中に「戦争は政治におけるとは異なった手段をもつてする政治の継続である」という一句がある。戦争は、形態は通常の政治行為とは違うけれどやはり政治行為だと、言葉のாயාを操って、戦争は国家の権利と認められた。それを資本主義陣営も社会主義陣営も支持した。マルクスと一緒に『資本論』を著作したエンゲルスは特に熱心なクラウゼヴィッツ支持で、そのため『戦争論』は左翼陣営の必読文献だった。それだけです。戦争は、人類のどのような公の場でも肯定されて承認されたことは今日まで全くゼロです。

(五)戦争は国家権力にとって両面の用途を持つ。ほしいものを争奪するため、あるいは

ている。現実の脈絡は、まさにワンセットでした。日本の軍閥と政府が最初に、やっではならぬあやまちを犯した。それに対する相手国と周辺社会の反応を見れば、自分のあやまちに気付くはずでした。そしたら、あやまちをやめて、詫言るべき相手に誠心誠意詫言びて、そして出直すのが人間として当然の反省ですね。しかし日本の政府・軍閥は、あやまちを犯したゆえの行き詰まりをごまかそうと、もつと大きなあやまちを重ねてしまった。それを私たち日本国民は、ずるずると追認して同調してきてしまった。社会のこの歩みの中で、私自身はどうしていたか。

一九三一年の私は一六歳で、横手中学校の五年生でした。そのころ一度だけでしたが、秋田市の陸軍第十七連隊の将兵たちが鉄道で出動するのを見送った。全校生徒が横手駅に出掛けて見送ることを学校の言い付けでやらされた。生徒たちは誰も何も持たずに軍歌を歌った。すると車窓から手を振る兵士たちがいたけれど、その人数は少なく、大半の兵士はちっとも勇壮には見えないで、思い沈んでいる表情だった。なぜだろう。村に残すのが家の暮らしの今後を考えてのことだろう、と考えたのは、しばらく時間がたつてからのことだ。

核爆弾を所有してしまったので、たやすく戦争を始めることは不可能になった。双方の核爆弾の使用は双方に大打撃を与え、共倒れにする可能性が増大した。それが現状ですね。

「戦争いらぬやれぬ世へ」と進む可能性は時と共に増すだろう。戦争は台風や地震と違って人間の作り出したものだ。人間たちが決意して働けば、戦争を否定して消滅させることが出来る。その可能性が増大していく、きっと。

日本は中国に決して勝てなかった

戦争が始まると世の有様はどうなっていくか、社会全般の動態を見た。では、社会を構成している各個人の場合はどうか。この文を書いている私自身を振り返って吟味して述べよう。

一九三二(昭和七年)に日本側が「満州事変」と呼んだ出来事を口実に中国へ侵略を始めてから、一九四五年八月に連合国軍の出したポツダム宣言を日本側が受け入れて、近現代史に前例のない無条件降伏をするまでの経緯を歴史学では「十五年戦争」と一括し

とされた。戦争を利用して、戦争を徹底させて、それぞれに社会主義体制を実現した。その体制は少なくとも二、三世紀は続いて世界の動向に影響する、と社会主義を嫌う人ほどそう思っていただろう。ところが半世紀そこそこで、打倒したはずの資本主義の体制に逆転してしまった。なぜだ、なぜです?

死者たちは答える口を失った。いま生きていて、なお生き続けようとする私たちが考えて答えねばなるまい。どんなデタラメと見える世の中だって、きちんと道理は貫かれている。何です、それは何です?

戦争が公認された根拠は皆無

この本の歩みは、こころが道半ばだな。足の旅ならここで一服だ。ふんどしを締め直して、体力にも気力にも活を入れる所だ。心掛けは、ペンの旅だけ一つだ。ここで、この本を世に送る意図を重ねて踏み固めて置こう。目的は、この世の有様を造り変えたのだ。私たち人間みんなが人間らしく生き、喜べる世に造り変えたい。そのための根本の仕事は何か。この世から戦争を無くすことだ。人と人が大量に殺し合う状態を許して、それを正当化させて、幸福も正義もへったくれもあるわけがない。戦争を無くせば、他のどの問題も道理に基づいておのずと解決していくな。

では、どうしたら戦争をなくせるか。戦争をなくすために、私たち人間は何をなすべきか。何をしてはならないか。それが後半のテーマであるが、ここまでの検討で痛感することは、敵を倒すには敵を知ること、その大切さだ。おのれがおのれを知る以上に敵の正体、その本質を知らないとは社会の敵は倒せまい。「反戦平和」と発声するだけのピラや行進や集会や決議を幾ら繰り返して、それだけでは戦争勢力には立ち向かえない。戦争をめぐる検討をもっと深めよう。

いま人の目に見える光景で、戦争は最も強烈で大規模で残酷であろう。それを見てへつぱり腰になつては、戦つて勝てるわけがない。戦争の持つ強さと弱点を皆で正確に確認し合つて、そこから出発しよう。

(一)われら人類が地球に登場したのは七〇〇万年前だ。全く新参者だ。そして戦争を始めたのは約五〇〇〇年前だ。すでに確認した通り、七〇〇万年を一日二四時間の時計にはめ込むと、戦争をやり出したのは二三時五八分五八秒からだ。まだ一分二秒しか経

つていない。それを肝に刻んでおかねばならぬ。それと同時に、もう一つの事実を確認しておかねばならぬ。人間は全員がほぼ共通の中身の遺伝子を、ほぼ等量に持っている。それは人類が多種多様の肉食獣に囲まれながら、自然の与えてくれる恵みだけに依存していた当時に、その経験から得た知能の結晶であろう。困難と苦難に囲まれながら、人と人がいかに力を合わせて生き抜いてきたか、その道を教えている遺伝子たちは、私たちの生き方、努力次第でよみがえつて私たちに加勢するだろう。

(二)戦争は、人間の用いる手段だ。方法だ。五〇〇〇年前から行われてきたといつても、戦争が自分ひとり歩いてきたのではない。歴代のいろんな権力者たちに用いられてきたものだ。それで戦争は彼らに何を与えたか。歴史書に登場する英雄や将軍や王朝は数え切れないが、彼らは戦争によってどれだけ繁栄し得たか。

有名な王朝の中で、二つだけ五〇〇年を超えて存在した。ハプスブルク家(二七三一―一九一八)の六四五年間、オスマン帝国(二九九―一九二二)の六二三年間だ。その次にロマンフ王朝(二六三―一九一七)の三〇四年がある。日本に攻めてきた中国の元王朝(二七九―一三五三)は七四年、あの万里の長城を造った秦王朝(前二二―前二〇六)

はたった一五年だ。シーザーやナポレオンの栄光は、あつという間でした。これらの事実を見れば、戦争というものはそれを愛用した権力にとつても割の合わないものだ。

(三)戦争がないと、社会生活にも個人生活にも気迫が薄れて、駄目になるという考えがある。これは社会が行き詰まったときに「何か、ドカーンと始まってくれないか」と待望する心理と重なつて、案外広く民衆の間に根を張っている。戦争が無いと世の中が駄目になるか、日本列島の徳川時代を振り返ってみる。

この時代のめばしい犯罪として語り伝えられてきたものは、忠臣蔵、八百屋お七、石川五右衛門、鼠小僧次郎吉だ。日本史の中でもっとも安全な時代であつたらう。幕末の黒船騒ぎやそれに続く幕府軍と新政府軍との争いがあつたが、あれらは現代語の「戦争」とは別だ。こうして見ると、豊臣秀吉の朝鮮出兵の慶長の役(一五九七―九八)から明治の日清戦争(一八九四―九五)までの二九六年間、戦争なしの時代が続いた。その時に咲いた元禄文化の花々は現在も豊かに咲き匂い続けているではないか。

もう一つ、戦争はなくても人間の気力は充実していた。不当な封建領主の搾取に対してもう一つ、戦争はなくても人間の気力は充実していた。不当な封建領主の搾取に對してわれわれの先祖の百姓たちが立ち上がった百姓一揆は、徳川期の後半だけで全国で三

つていない。それを肝に刻んでおかねばならぬ。それと同時に、もう一つの事実を確認しておかねばならぬ。人間は全員がほぼ共通の中身の遺伝子を、ほぼ等量に持っている。それは人類が多種多様の肉食獣に囲まれながら、自然の与えてくれる恵みだけに依存していた当時に、その経験から得た知能の結晶であろう。困難と苦難に囲まれながら、人と人がいかに力を合わせて生き抜いてきたか、その道を教えている遺伝子たちは、私たちの生き方、努力次第でよみがえつて私たちに加勢するだろう。

(二)戦争は、人間の用いる手段だ。方法だ。五〇〇〇年前から行われてきたといつても、戦争が自分ひとり歩いてきたのではない。歴代のいろんな権力者たちに用いられてきたものだ。それで戦争は彼らに何を与えたか。歴史書に登場する英雄や将軍や王朝は数え切れないが、彼らは戦争によってどれだけ繁栄し得たか。

有名な王朝の中で、二つだけ五〇〇年を超えて存在した。ハプスブルク家(二七三一―一九一八)の六四五年間、オスマン帝国(二九九―一九二二)の六二三年間だ。その次にロマンフ王朝(二六三―一九一七)の三〇四年がある。日本に攻めてきた中国の元王朝(二七九―一三五三)は七四年、あの万里の長城を造った秦王朝(前二二―前二〇六)

戦争の始まりは、蓄積された富が勢力者の私有財産になった時だと社会科学者は言う。それは、人が人を奴隷として使うことが世の仕組みになった時だった。戦争の目的は富の蓄積を増やすためだ。そして戦争をやるための組織が人の世の全体に影響して、農耕国家と都市国家、それにオアシス地帯の遊牧国家が増えるにつれて、戦争は広がりとしさを増していった。氏族と部族の連合国家や帝国が生まれると、戦争は奴隷と土地と貢ぎ物を略奪し合う残酷さを増していった。そして中世の封建時代になると、国王と領主と武士の主従関係で権力が構成され、戦争は主に領地拡大のためであった。ところが貨幣制度の発達、市民階級が増大して財力を強めたこと、国王がこの市民階級と結んで権力を拡大したことが情勢を変えた。戦争は、敵勢力の絶滅を目指す激烈なものとなり、大規模な傭兵集団が動員された。

ここで近世の検討に進むところだが、近世の時代区分は国によってまちまちだ。この文章では、コロンブスの冒険から現代までの歩みを一括して振り返ってみよう。クリストファー・コロンブスという四二歳の貿易商人が一四九二年に到達した所はアメリカ大陸の海域で、その地域(北米)にはすでに少なくとも数百万人もの先住民が住んでいたか

言葉があるか、教えてください」と。大尉殿は答えないで、奥へ引き込んだり出てこなかった。五人の学生は三宅坂を下りながらニコニコしていた。ことが思い通りの成りに行ったことに満足していたと思う。

では五人の学生は何を求め、何をたくて新聞班に出かけたのか。それを現在の私は全く思い出せない。陸軍省行きにつながるものが、その時の前目にも翌日にも全く欠けていたからだろう。まともなことは、何も出来ない時代でした。戦争への非難どころか論評しただけで、裁判抜きでひどい目にあつた人が何人もいた。そういう現実の戦争が、文化や進歩の親であるわけがないね。

人間生活の進歩を壊す戦争が、何ゆえ約五〇世紀も続いてきて現在も横行しているのか。一般の民衆は、戦争で苦しみと悲しみを山ほど背負わされてきたのに、なぜそれを約五〇世紀も許してきたのか。それをみんなで自問して自答せねばならないが、その前に実際の戦争がどう行われてきたかを見よう。

民衆は戦争にどう対応したか

々の制約が加えられるようになった。そして戦争に対する民衆の態度は双曲線を描いた。一方は戦争に同調して協力した。権力側の支配に抵抗できなかった面もあるが、母なる国への愛情もあつたらうし、戦争は国家の行為だから、国民として出来るだけ協力するのが当然だという動きであった。他方には戦争を批判して反対する動きは、迫害されたが、いつも存在した。しかし、多くの場合、個人あるいは小勢力での行動にとどまった。やがて、資本主義の最高段階とされる帝国主義の行動は、民衆の目覚めを刺激した。分割された国民の統一運動、虐待される民族の解放運動、搾取される労働者や農民階級の権利回復の社会運動などが第一次世界大戦のころから各地で胎動し、やがて第二次大戦の終わった後の半世紀の間に激しい闘争を経て民衆の要求を貫徹させた。

人民を圧迫して搾取した権力階級は、戦争を手段として愛用してきた。権力の圧政に抗して正義を実現しようとする人民勢力も、また戦争を手段とした。それでいいのか。「目的が手段を選ばず」これはモラルの土台だ。自分の目的を達成するためなら、何をやるつてもよいわけではない。目的にふさわしい手段を選ばねばならぬ。レーニンさんも毛沢東さんもホーチミンさんも、自分たちの革命運動で「戦争を通じて革命へ」を合言葉

ら、新大陸の発見なんて騒ぐ出来事ではなかった。ヨーロッパとアメリカの航路の開拓に過ぎなかった。それをヨーロッパは「大航海時代の開幕だ」と誉めたたえ、歴史書の多くが今もそれに追従している。そのころグローバル化し始めていた貿易戦争の先頭にヨーロッパが立っていた。彼らが自賛した「大航海時代の始まり」のその実体はアジアやアフリカの後進地帯を次々に植民地化していく「大略奪時代の始まり」だった。そのため用いられる兵器の威力は増し、軍隊の規模も組織も一変した。陸軍のほかに海軍が編成され、あちこちで海戦が起こった。

更に一八世紀からの産業革命としてフランス革命が、その後の世界の動向に及ぼした影響は深い。この二つの出来事は重なり合って世界の政治と経済と思想に影響し、軍事情勢をも刺激した。そのことは、項目を改めて検討する。

この間に一般の民衆の戦争と軍隊に対する態度は、どうであったか。農耕地帯の勢力者や封建時代の領主や国王のやる戦争の時には、軍隊は彼ら内部の手下、家来や傭兵でまかなわれ、一般の民衆は戦費のための納税を命じられて、それを払えばよかった。けれど戦争の大規模化に伴って、徴兵制度が設けられ、民衆の産業活動や日常生活にも種



第2章 農耕の中から何ゆえに戦争が?

世でもやれないのか。問うメスを各自がおのれ自身に突きつけて、そして自分の答えを自分に提示しましょう。

戦争は二三時五八分五八秒から

前章を結んだところで、青森市の三内丸山を取り上げたが、あそこは約五五〇〇年前から四〇〇〇年前までの住居跡で、推定される人口は約五〇〇〇人、当時の大都会だ。そこに住んでいた津軽の人たちの暮らしは和やかで、闘争の痕跡はない。それに続けて、津軽の風に平和への祈りを語らせているのは、おかしいと首をかしげた人がいるかも知れない。敏感なその人に答えます。

現在から五〇〇〇年の過去は農耕創始からの五〇〇〇年後と重なっているが、まさにそのころ、人間たちの生活に新しい光景が加わって、吹く風が血なまぐさくになり始めていたのです。食べ物がい前より恵まれたとはいえず、個人の平均寿命の伸びや総人口の伸びは遅々としていたけれど、一緒に暮らす単位グループは約三〇人から約五〇人に増えた。それだけで血なまぐさいにおいが出て来た。まだ戦争なんて言えないが、数十人と

数十人とで対立して争って、数人を殺傷したりしていた。まさにその時に農耕創始に次ぐ大変革とも言うべき「書く言葉」「文字」が登場した。

人類史の長さを七〇〇万年カッキリとして計算すれば、人類は出現から六九九万五〇〇〇年の間、意志を伝え合う方法は「言う言葉」「会話」といっても実際には叫びを二つ三つつなげるだけのものでした。当時の人間生活では記録も保存も計画も必要なくて、数字は一から三〇程度まで間に合ったでしょう。そんな有様で当時の人類は戦争をやる必要も、やる能力も無かったことは明白ですね。人類がイクサをやり始めたのは、うんとさかのぼっても五〇〇〇年このかたです。七〇〇万年を二四時間の時計に当てはめれば、戦争開始は二三時五八分五八秒です。このことは皆で記憶し続けるべきです。「人間ってやつは根っから争い好きで残酷だから戦争は無くせない」というマボロシ論を消滅させないといけません。

本題に戻ろう。書く文字の登場を促した主因は、農耕の進展ですね。農耕が進んで広がるにつれて、栽培量も生産量も増える。余ったものは蓄えて、やがてあちこちへ運ぶ。それを発声で記憶するだけでは間に合わない。そこで、記録して保存するのに役立つも

第2章 農耕の中から何ゆえに戦争が?

の、文字の出産が必要でした。今わかっている最古の文字として、五五〇〇年前のメソポタミアの楔形文字、五一〇〇〇年前のエジプトのヒエログリフ系文字などがある。農耕から生まれた戦争は、それをやるたびに自分を増やし、その規模も大きくした。三三〇〇年前、中国に甲骨文字が生まれた。そして三〇〇〇〇年前に東地中海のフェニキアで生まれた文字が母親となってアルファベット文字が生まれて、世界各地に広まった。

日本語の「文化」はスペイン語では「クルトゥラ」で、その原意は「耕作」だ。耕作は土を耕して人間たちに食べさせながら、人の世そのものを耕して変えてきた。余った作物は蓄えられて富となり、富は権力となり、権力は国家を生み、そして国家がわが身を守って、他国を攻める手段として戦争が出て来た。そして戦争それ自身が戦争を増やし、文化による産物で自分に役立つものは貪欲に用いて自分を激烈に増大させた。そして農耕の出発からすれば孫の孫のような社会現象なのに、人間社会の主人づらをするようになりました。無論これは近代になってからのことですが、……と書いた途端、私の記憶の一つがボンと目の前に飛び出して来た。スペイン語を書いたので、スペイン語を学んでいた当時の記憶がよみがえったのでしよう。いかが、道草を一本、食べません

か。

軍人の威張った一九三〇年代の半ばの日本です。陸軍省に「新聞班」なる組織が出来、愛国主義や軍国主義を宣伝するパンフレットを作って全国にばら撒くなどした。諸学校にも送られて来た。「戦争は進歩の父、文化の母」という一句のある印刷物が問題になり、それが「たたかいは進歩の父、文化の母」と刷り直されて、また配布された。当時の私は東京外国語学校の四年生で弁論部の代表委員をしていた。弁論部はこの大学、高等専門学校にもあって、協力して弁論大会を催し、学生が社会に向かって発言できる唯一の場となっていた。反骨の連中がそこに集まっていた。

ある日、学校の弁論部の仲間五人で陸軍省新聞班に出かけた。対応に出た陸軍大尉に質問した。「たたかいは」という平仮名四字を外国語に訳すと、ウオーカバットルか、もつと別の適当な単語がありますか」と。大尉殿は「ウオーカバットルかな」としばらくつぶやいた後で、金切り声を出した。「キミたち、ほれ、ニッポン語にセツサタクマ(切磋琢磨)というのがあるだろう。あれだよ、あれだよ」と。すぐ学生の一人が質問した。「では、セツサタクマを英仏独の三か国語と印度語と蒙古語に訳すには、どんな

第2章 農耕の中から何ゆえに戦争が?

歴史の歩みを古代から現在に向かって確かめて、現代人のわれわれが努力せねばならぬ目標目的をはっきりさせよう。検討していく中軸は戦争にする。

貧困と病気と戦争が人類の三大敵とされて久しいが、そのどれもが過去そのままの要因が重なる。戦争は違う。個人は戦争をやれない。やれるのは国家だけだ。個人たちは動員されて、命令されて、使用されて、そして犠牲を払うだけだ。個人群の中には戦争を肯定し、賛美し、それに便乗しようとする者もいるだろうが、それは少数であろう。大多数は、戦争は無ければよいと思っただろうから、無くせばよい。今は国民が国家の主権者だ。大部分の国民が決意して行動すれば、国家の意思をどうにでも決められる。戦争を無くして、そのために用いられてきたヒトの力とカネとモノを余さず残りの二大敵の退治につき込めば、貧困も病気も苦しみの八〇九割は必ず解消できるだろう。苦惱退治のこんな素敵な方法があるのに、何ゆえそれを数千年前の世でも、今のこの

第二章 農耕の中から何ゆえに戦争が?

\* 16ページから11ページに遡る形で上段右上から左上、下段右下から左下の純で読み進みます。

第2章 農耕の中から何ゆえに戦争が?

数十人と対立して争って、数人を殺傷したりしていた。まさにその時に農耕創始に次ぐ大変革とも言うべき「書く言葉」文字が登場した。

人類史の長さを七〇〇万年カッキリとして計算すれば、人類は出現から六九九万五〇〇〇年の間、意志を伝え合う方法は「言う言葉」会話といつても実際には叫びを二つ三つつなげるだけのものでした。当時の人間生活では記録も保存も計画も必要なくて、数字は一から三〇程度までで間に合ったでしょう。そんな有様で当時の人類は戦争をやる必要も、やれる能力も無かったことは明白ですね。人類がイクサをやり始めたのは、うんとさかのぼっても五〇〇〇年このかたです。七〇〇万年を二四時間の時計に当てはめれば、戦争開始は二時五八分五八秒です。このことは皆で記憶し続けるべきです。「人間ってやつは根っから争い好きで残酷だから戦争は無くせない」というマボロシ論を消滅させないといけません。

本題に戻ろう。書く文字の登場を促した主因は、農耕の進展ですね。農耕が進んで広がるにつれて、栽培量も生産量も増える。余ったものは蓄えて、やがてあちこちへ運ぶ。それを発声で記憶するだけでは間に合わない。そこで、記録して保存するのに役立つも

世でもやれないのか。問うメスを各自がおのれ自身に突きつけて、そして自分の答えに自分に提示しましょう。

戦争は二時五八分五八秒から

前章を結んだところで、青森市の三内丸山を取り上げたが、あそこは約五五〇〇年前から四〇〇〇年前までの住居跡で、推定される人口は約五〇〇人、当時の大都会だ。そこに住んでいた津軽の人たちの暮らしは和やかで、闘争の痕跡はない。それに続けて、津軽の風は平和への祈りを語らせているのは、おかしいと首をかしげた人がいるかも知れない。敏感なその人に答えます。

現在から五〇〇〇年の過去は農耕創始からの五〇〇年後と重なっているが、まさにそのころ、人間たちの生活に新しい光景が加わって、吹く風が血なまぐさくなり始めていたのです。食べ物以前より恵まれたとはいえ、個人の平均寿命の伸びや総人口の伸びは遅々としていたけれど、一緒に暮らす単位グループは約三〇人から約五〇人に増えた。それだけで血なまぐさいおいが出て来た。まだ戦争なんて言えないが、数十人と